

文明哲学研究所
設立の宣言

―核廃絶と世界平和のために―

「藝術立国」を建学理念とし平和を希求する我が大学は、
人類存亡の淵に立つ今このとき、
人間の良心を基調とする新たな文明の創造をめざし、
文明哲学研究所の設立を決意した。

宇宙の神秘に平伏せ
地球の偉大さに畏れを抱け
生きとし生きる命を愛し尊べ

人間とは何か。

文明とは何か。

人間と文明との関係はいかなるものか。

人類史は、文明の興亡盛衰の歴史であった。

地球上に人類が誕生して以来、いくつもの文明が生まれ、隆盛を極めては衰退滅亡し、

その繰り返し返しの果てに、今日の現代文明に至った。

—どの文明においても、

滅亡の基本的な原因は社会の内部からの崩壊現象であり、

外部からの侵略だけで崩壊した文明は本質的に一つもない――
諸文明の興亡盛衰をつぶさに研究したアーノルド・トインビーは、
歴史の教訓として、そう喝破した。

いかなる文明もいつか崩壊する。
廢墟となり砂漠と化した過去の文明の痕跡は、
永遠不滅の文明は存在しないことを教えている。

有史以来、人類は自らの生への欲望を達成するために、
ひたすら便利さと効率を求め、
生きとし生きる生命を奪い、地球を破壊し、
いつしか、それが文明であると信じるようになった。

人類史を通じて、
今日ほど多くの人間が、かくも裕福に暮らした時代はない。
しかしその陰で、これほど多くの人間が地獄の苦しみに喘いでいる時代もない。
貧困に苦しむ十億人を超える人々、

飢餓で死んでいく数多くの子どもたち、
果てしなく続く戦争と殺戮、
地球上の生物種を刻々と絶滅に追いやる自然破壊。

なかんずく、

現代文明が生み出した最大の悪魔である核。

この核こそ、文明最大の矛盾である。

現代文明の基軸をなす最先端の科学技術の所産でありながら、

その科学技術をもってしても制御不可能な核。

その廃絶なくして、新たな文明への道は拓けない。

文明の闇と光。

人類が一万年をかけてたどり着いたその姿を省みて、

文明とは、善であったのか、それとも悪であったのか。

幸せと平和をひたすら追い求めながら、

自らの欲望に翻弄される宿命を負った人間。

美と真実に憧れながら、

自己保存のためには他の生命を抹殺することも厭わない人間。

善と悪の狭間で絶えず揺れ動く人間。

我々は、この人間存在の矛盾を直視し、

自己中心的な欲望や傲慢と対決しなければならない。

文明とは何か――

この根源的な問いのもとに、いま我々は、新たな闘いを開始する。

人類存亡の淵に立つ今このとき、

欲望に支配された文明の潮流を断ち切り、

新たな文明の創造に向かわなければならない。

闘いの武器は、人間の良心である。

文明に対する徹底した自己反省と、

何よりも、人間だけに備わっている良心の復活、
それこそが、新たな文明哲学の出発点である。

いまここに、文明哲学研究所を設立し、

アジア全域の志ある人々、さらには

平和を希求する全世界の人々と堅く連帯し、

人間の良心を基調とする新たな文明の創造に立ち向かうことを誓う。

二〇一二年十月

一

第1回
平和文明会議
会議録

人類は
核エネルギーに
耐えられるか

参加者（敬称略・順不同）

徳山詳直

松本健一（座長）

大石芳野

豊崎博光

小松正明

奥本京子

尾池和夫

宮島達男

秋山豊寛

田口洋美

ヤノベケンジ

井原甲二

平和文明会議の提言構想

井原 本日は文明哲学研究所の第一回平和文明会議にお集まりいただき、まことにありがとうございます。本会議のメンバーの先生方のプロフィールをご紹介した後に（*省略・巻末に掲載）平和文明会議が何を目指しているのかを掲げました五つの提言構想についてご説明いたします。

【平和文明会議の提言構想

——人々の「暮らし」が平和で人間性豊かであるために】

1. 原発・核兵器のない次世代づくり
- * 二十世紀「エネルギー革命」実験の失敗を検証
 - * 「時代遅れになった核エネルギーと核兵器」という知見の構成
 - * 原発・核兵器の廃棄へのアプローチ
 - * 次世代の新エネルギー構造

2. 現代の錯綜「原子力サイクルエネルギーによる資源の大量消費社会」からの脱却

* 原子力エネルギーサイクルの完全放棄

* ダイナミックな地球循環型社会構築（経済学、社会学を含む）

* 再生可能エネルギー（太陽エネルギーなど）の可能性と限界

* 「大量消費社会」という虚構からの脱却とその方策

3. 健全な生態系の維持を第一義とした「宇宙船・地球号」構想

* 地球システムにおける生態系のあるべき姿

* 地球はどの範囲まで人間圏に耐えられるか

* 「宇宙船・地球号」という視座からの文明と生態系のありよう

* 「生きもの（エンド）」からみる文明（科学技術）の許容範囲

4. 人類共通の精神文化「良心」によるクリエイティブな人類社会の作興

* 良心は人類共通の精神文化

* 藝術（真・善・美・聖）は人類共通の精神文化となりうるか

* 人種・文化・宗教などの多様性を超えて民族を結び合わせる精神文化

* 「多様性」を許容しあえる人間圏システムの構築

5. 平和と安全を基礎とした地球社会文明構築への提言

* 人類は「平和」に耐えられないのか？

* 「閉ざされた惑星・地球」という視座からみる「平和」というファクター

* 平和とは何か：地球社会を構築する為の平和文明とは何か

* 地域紛争、宗教紛争をどう平和に転化するか

◆ 創設者としての最後の闘い

井原 それでは、会議に入ってまいりますが、最初に本学の理事長である徳山詳直よりご挨拶を申し上げます。

徳山 きょうは、私にとっては、人生最大の日です。まず、私はなぜ文明哲学研究所を始めたのかというお話をしなければなりません。設立宣言文にすべて書いていますので、もはや先刻承知のことと思いますので、そのことはもう言いません。

私が、いつも不思議に思っているのは、ノーベル賞のことです。一九〇一年にアルフレッド・ノーベルが残した大金、それは戦争に使われるダイナマイトの発明で儲けたお金ですが、それを基にノーベル賞がつくられた。そのノーベル賞は、人類にとって素晴らしい功績を残した人に与えられるものだと言うけれど、ノーベルという男は果たしていかような人物であったのか。いかような哲学を持っていたのか。……私にはいまだに理解ができません。

人類はこの百年、あるいは数百年、ほんとうに発展してきたので

しょうか。人間がますます劣化して、いったい人間とは何なのか、これがほんとうに人間なのか、そう思わざるを得ないような状況にいよいよなってきたのではないかと、まことに絶望的な気持ちでこの場に立っています。しかし、私の絶望は決して悲観的な絶望ではなくて、非常に樂觀的な絶望です。生まれてきたものは必ず去っていく。人類もそうである。これが生きとし生きるものの運命だと考えていますから、決して悲観的に考えているわけではありません。

ただ、どうしても思わざるを得ないのは、もはやこれ以上の叡智はないだろうともてはやされている千名ちかいノーベル賞受賞者たちのことです。彼らを見てください。彼らはほんとうに人類の救世主でしょうか？　ほんとうに人類の平和と発展に尽くしたのでしょうか？　私はどうしても納得できません。このノーベル賞受賞者の中には、核廃絶の闘いこそ、人類にとつての最後の闘いだと、そう意志決定をした人が一人もおりません。私はこのことが残念で残念でなりません。ノーベル賞をもらって、偉い人になって、お金をたくさんもらって、とても有名になった。そんなものが、人類の平和と人類の幸せに、いったいどんな役割を果たしたのか。私はそんな

ことに憂き目をやつしている暇があるなら、核廃絶の闘いに全力を上げると言いたい。

今人類にとってのもっとも大切なことは何か。たった一つ、核廃絶の闘いに立ち上がることです。これ以外に大事なことは何もありません。もしこの問題が解決できれば、人類はきつと平和な時代を迎えることができます。そうすれば安心して本当に幸せになれる時代が必ずやってきます。そのためには何とでも核廃絶を目指して闘う。これが最後の、最大の眼目です。この問題さえ解決できれば、必ず人間の未来にあかりが灯ると確信しています。私は他に何も言うことはありません。

こんなことを申し上げたら、ここにおられる学者の方たちに大変申し訳ありませんけれども、私は学者という部類の人間をあまり信頼していません。大変失礼なことを申し上げるかもしれませんが、私は幾百、幾千の科学者たち、あるいは学者という人たちとお付き合いをしてきました。そして、いろんなことを学んできました。しかし、私にとって本質的な意味で学ぶべきものは何もありませんでした。私が最後に知りたかったのは、核廃絶はいつたいどうすれば

できるのか。このことが知りたかった。このことを私に正面切って語ってくれた人は、一人もいませんでした。私はそれを考えると、失礼ながら学者というのは、地位と名誉と、生活のために生きていくだけにすぎないのではないかとさえ思えてしまう。

だから私はそんな世界の人とは決別していきたい。でも、そう言いながら、実はここに科学者がおります。私から見たら、日本一の科学者です。実は三、四年前から、このお方に本学に来ていただきたいと考えていたんです。

私はこの大学が少しずつかたちになってきて、本当に世のため、人のために役に立つ大学になっていきそうな、そういう気配が見えてきたとき、いよいよ最後の決戦が近付いてきたぞと思いました。そのころは私も、もう八十を迎えることになっておったけれど、ここで、最後の決戦が始まるんだと武者震いがしました。最後の決戦とはいったい何か。それは核廃絶の闘いだ。そう決心したときに、いったい誰をこの大学の学長として、総帥として迎えるべきなのかと考えました。約三年、考えて、考えて、考え抜いて出た答えが、このお方です。そして、「あなた、学長をやってもらえませんか？」

と頼んだら、「何で学長になるんや? どういう理由や?」と聞かれました。私は「理由は言わない。理由を言うても、うまく説明ができない。学者には”学“で話をせんといかん。けど、僕は学者じゃないから、話ができない。とにかく理由を聞かんといてくれ。あなたが欲しい。あなたにうちの大学の学長になってほしい。あなたがうちの大学をつくり直してくれることによって、日本の国は新しい世界が見えてくる。僕はそう思ってる」と、それだけ申し上げた。そうしたら、「もう質問はしません。理由は聞きません。だから、なぜ学長を引き受けるかという理由を僕も言いません」と言われたように記憶しています。

これが私の命を懸けた全人生の最後の闘いが始まる今日の大事な最初の言葉です。この人を学長に迎えて、皆さんに披露して、一緒に力を合わせていただきたい、それをお願いしたくてここに立ちました。これが私の挨拶です。どうぞよろしくお願いいたします。



両大学の理念を具現化する文明哲学研究所

井原 ありがとうございます。続きまして、今、理事長がお話しされました京都造形芸術大学の尾池学長からご挨拶を賜りたいと思います。

尾池 この研究所が設定した平和文明会議の第一回ということですので、この研究所の本部が置かれている本学の学長として一言ご挨拶を申し上げます。それから、今日のご挨拶をWebサイトのホームページにも貼り付けてもらおうというつもりで話をさせていただきます。この会議は映像としても記録されるんでしょうけれども、前もってお知らせにあつたようにアーカイブすることもたいへん意味のあることと考えております。

この文明哲学研究所は、今、徳山理事長が言われたように、「核廃絶と世界平和」に向けてということ、京都造形芸術大学と東北芸術工科大学の共同研究機関として設立されました。それが昨年十月二十七日でした。その後、井原所長を中心にして研究活動の準備

が着々と進められまして、専門家による研究会議として、この平和
文明会議が設定されました。その他にもさまざまな活動を企画して
おられますので、これはまた追い追い表に出てくると思います。

私も文明哲学研究所の設立の発起人ということで、そのときはま
だ学長就任の話を受ける前ですけれど、理事長に言われて参加させ
ていただきました。この会議においても地球科学者の立場から意見を
を申し上げたいと考えております。もう一つの側面としては、大
学の「教育」「研究」「社会貢献」という使命を考えたときに、今
七十二歳の私が、十八歳の頃から五十年以上ずっと大学にいて、大
学の目的というところに貢献してきたつもりでおりますので、その
力の限りご協力を申し上げます、参加させていただきました。この
会議にご参加くださる皆様にも心からお礼を申し上げますとともに、
大いに期待しております。

文明哲学研究所の設立理念は徳山理事長によって高らかに宣言さ
れております。「文明哲学研究所設立宣言―核廃絶と世界平和のた
めに―」と表明されているのですが、なかなか難しく、私もまだ
まだ理解できません。その宣言を繰り返し繰り返し読んではいらん

ですけれども、読み返す度にまた新しい発見があるような、そんな感じがします。今日から始まるこの会議で議論を通じて、さらに宣言の中身の理解を深めていきたいと考えておりますし、おそらくそのような会議になっていくであろうと期待しています。

研究所の活動の内容について、少し具体的な提案を申し上げますと、時々刻々この会議の内容を世界に向けて発信していくことが設立の理念を実現するために必要なことではないかと考えます。この閉じた空間の中で議論しているだけ、あるいはそれを記録したものを発信するだけでは、なかなか伝わらないのが現実です。どういうふうに発信していくかはこれから皆様のお知恵を借りなければなりません、それと同時に、この研究所の持つ意味と、研究活動を紹介するメディアに関してご検討をお願いしたいことがあります。

本学は毎春、ある分野の教員たちが学生に自身を紹介する「春の顔見世展」を開催します。私も自分の著書と一緒に一枚の絵を展示しました。犬山にあります霊長類研究所にアイというチンパンジーがおりまして、これが私の親友と言ってもいいのですが、京都造形芸術大学の学長に就任するお祝いにアイが描いてくれた絵です。入

「学式の式辞でも申し上げたのですが、その絵を見て、チンパンジーが描くところも動画でも見ていただいて、芸術とはいったい何なのか、人類とは何なのか、絵を描くとはどういうことなのかということを学生たちに考えてほしい、そういうメッセージとして見せたわけです。」

その話をするのが目的ではありませんが、実はチンパンジー研究の内容を漫画で表現したものがあつたのです。これを皆さんに回覧いたします。四カ国語で作られています。研究の内容をなるべく正確に伝えるストーリー漫画という一つのジャンルを確立したものであると思つています。この仕事をした牧野圭一さんが幸いにしてこの大学の教授に就任しておりますので、それを活かすべきではないかと考えるわけです。

私は、文明哲学研究所の設立理念を全学科の学生に提示して、そこから受け取る意味を、芸術活動ですから、漫画や、あるいは紙芝居、動画などいろいろな芸術作品があり得ると思つていますが、自分自身の表現で学生たちに展開してもらつたことを提案したいと思つた。これは言うまでもなく、設立宣言の世界を学生に伝えることそ

のものであると思いますし、それがこの研究所の一つの役割でもあると考えるからです。その手段の一つとして、宣言を日本語で伝えることはすでに始まっておりませんが、各国語でもこれを伝えるようにしてほしい。そして、あらゆる手段を活かして、本学の特徴を入れながら、マンガ学科の一つのカリキュラムもしくはコースとして、研究所の設立宣言を具体化するというような試みができないだろうか、これが私の提案です。そういう芸術活動のプロセスを通じて、まず本学の学生が設立宣言の理念に対して理解を深めてほしい。そのプロセスを通じてこそ、初めてこの研究所の活動が世界に広がっていく第一歩になるのではないかと考えています。

私は二人のパブロが大好きです。パブロ・ピカソの「ゲルニカ」という絵をマドリッドまで見に行きました。もう一つ、国連の総会の席でパブロ・カザルスが「鳥の歌」という曲をチェロで演奏しました。その二つを見て感じたことは、芸術活動そのものには平和をもたらす直接の能力はないかもしれないけれど、そういう芸術活動に触れた人に世界平和へ向かわなければいけないという意志を強く持たせる作用があるということです。

だとすれば、京都造形芸術大学と東北芸術工科大学、この両方の大学は「藝術立国」を目指しておりますが、そういう大学の理念を具体化する一つのきっかけというのも、今申し上げた提案から出てくるのではないでしょうか。だから、私はその橋渡しをして、マンガ学科の人たちと議論をして設立宣言を表していくことはできないかという呼びかけを試してみたいと思っています。

これから、とりあえず二年間の平和文明会議の中で情報の共有に加えて、思想の理解も共有しながら、「核廃絶と世界平和」の実現に向けて歩んでいくことになると思いますが、とにかくそれをよろしくお願いして、私の最初のご挨拶とさせていただきます。

井原 ありがとうございます。それでは、ここから会議に入りたいと思いますが、先ほど学長先生からお話がありました。映像に撮ってアーカイブして、研究所のホームページ上で発表させていただきます。ご協力をお願い申し上げます。

それでは、座長の松本健一先生の講演を頂戴いたしましたして、その後、松本健一座長の司会によって議論を重ねてまいりたいと思います。松本先生、よろしくお願いいたします。

新しい
文明の
創造のために

講演

松本健一（平和文明会議座長・麗澤大学教授）



現場・現実に無知だった官邸周辺

それでは、これから一時間ぐらい、私が話をさせていただきます。その後も、今回は一回目ということもありますので、ご出席の皆様方に私の講演に対するご意見、基本的な平和文明会議に対する提言、あるいは普段からお考えになっっている文明観などを全員の方に出していただいて、次回からどういう形で話を進めていったらいいかと考える場になりたいと思っております。

実は、私が座長に選ばれたのは井原所長からの命令でありまして、私がなりたいと申し上げたわけではありません。というのも、「平和文明」と銘打つと、それがどういう社会的、政治的問題を引き起こすかということも、いろいろ考えなければならぬと思っていますからです。特に今日の会議テーマである「人類は核エネルギーに耐えられるか」というテーマも私が考えたわけではなくて、第一回目だから全体的、抽象的ということと事務局が予め考えてくださったのです。しかし、核エネルギーということになれば、太陽光エネルギーも一応核エネルギーですから、そうすると「太陽に耐えられるのか」

という難問も出てくるわけで、ここは皆さんと考えを詰めていかなければならないだろうと思っています。

そういう座長という立場も、テーマ設定の表題にも、私はまだじっくり来ないものがありますけれども、では、なぜ座長を引き受けたのかというと、これは、大きくいえば運命だと私は思っています。

二年前の三月十一日に、私は首相官邸に参りました。そのときは内閣官房参予という役職についており、週三日ほど、首相官邸に通っております。内閣官房参予といっても、私が要請されたのは本来的にいうと、東アジアの外交及び東アジア共同体構想について考えることで、二〇一〇年の十月に就任しました。ちょうど尖閣諸島の問題が非常に大きくなっていったときで、その直前には日韓併合百年記念にあたって韓国から百年前の日韓併合は非常に遺憾である、謝罪すべきである、それが今日、日韓の関係を非常に困難にしている、そういう圧力がかかっていたときでしたので、菅首相は謝罪、お詫びのメッセージを出し、私はそれに協力していました。それ以外にも、二〇一一年が辛亥革命から百年、二〇一二年が中華民国成立百年、そして、同じく二〇一二年は日中国交正常化四十周年に当たり

ますので、この三、四年は、東アジアの百年の外交史、そして、日本の侵略戦争の間違いが再び蒸し返されるに違いない。未解決のこのアジアとの歴史問題をどう捉えるか。そのことに踏み込まずしてアジアの外交は成り立たないと考えた菅政権が、私に内閣官房参与の就任を要請したわけです。

ところが、就任してわずか五カ月後、二〇一一年の三月十一日、私が首相官邸にいたときに、「3・11」の東日本大震災が起きました。そして、すぐに福島第一原発が爆発をしました。ですから、私は自分にとっての主務ではないけれども、官邸にいて、あの東日本大震災問題、そして福島第一原発の事故の問題をきちんと考え、国家として、あるいは国民をどう救うか対処しなければならぬ、少なくとも自分はそれをすべきだと考えたわけです。それが私にとって運命の「3・11」であるという意味です。

福島第一原発の爆発において放射能がまき散らされたという問題も、当時、首相官邸にいれば、当然、こんなことは内閣で、あるいは何千人という官僚たちが考えてくれるだろうと思っていました。東日本大震災の大津波で被害を受けた方、二万人近くの亡くなられ

た方や行方不明の方がいらして、そして現在でも三十万人以上の方が避難を続けている、という問題についても官僚で考える人がいなかったのです。官僚は政治的に「無責任」ですから、指示がなかったので動けなかった、と答えるでしょう。

考える人がいないだけでなくて、先ほど徳山理事長は「学者など信用できない」とおっしゃいましたが、復興という問題においても、学者は現場を見ておりませんから、大津波がどこを襲ってどういう被害が出たのか、きちんと分かっています。東日本の海岸線はみんな同じような被害に遭ったと思っっているわけです。それは、要するにテレビで観て情報として知っているということであって、実際に港、港に行ってみれば、全部地形が違って、そこでの産業も違うことがはっきりと分かります。同じ漁業と言っても、遠洋漁業に出ているところは人的被害があまり出ていません。四百キロから七百公里ぐらい先に船を出していますから、津波に遭っていないのです。気仙沼の港などはほとんど破壊されて家はなくなっています。たけれど、人的被害が非常に少ないのは、そのためです。ところが、近海漁業の場合は、入江でホタテやワカメを養殖、栽培し、アジな

どを釣っていますから、湾に張り付いて生活しています。そういう場所ではたいへんな人的被害が出ている。その違いも分からない学者が多いのです。そして、東日本は全部漁業をやっていると思っ
ているのです。

岩手県は確かにリアス式海岸で入江ごとに大小の港があるけれども、宮城県はそうではありません。北には石巻や塩釜のような大きな漁港がありますが、三分の二は仙台平野で農業をやっているんです。それも、四百年の間、米を作ってきた。最近では、巨理（わたり）のようにイチゴを仙台に持って行って売るという近郊農業型の、米栽培ではない農業をやる農家も増えていきます。ですから漁業より農業のほうが被害を受けている、ということになります。その違いも実際に現地に足を運んでいないと分からない。

そして、福島県のほうには漁港はほとんどないのです。農業も中通りという海岸線からずっと奥に入ったところではやっています。が、福島第一原発、第二原発がある浜通りあたりは、もともと農業も漁業もできないような、海岸線に五十メートルの断崖が続いているところ。その五十メートルの断崖を四十五メートル削って、

高さ五メートルのところに福島第一原発を建てた。そこに、十五メートルの津波が襲ってきて外部電源をすべて喪失することで、福島第一原発の水素爆発（*）が起こったわけです。ですから、福島の復興のそもそもの問題は、農業復興でも漁業復興でもなく、まさに福島第一原発をどういうふうに終末させるか、放射能汚染にどう対処するか、というものなのです。

❖ 「居住禁止」提案の真実

ところが、皆さんも思い出していただくと分かると思うのですが、まず原発が電源を喪失し、冷却が出来なくなると、水素爆発を起こしたとき、「三キロ圏内の人は避難をなさい。いや、三キロ圏内だけではすまない。十キロ圏内、二十キロ圏内の人も避難しなさい」というように同心円状に避難地域を拡大していきました。これをおかしいという官僚も、学者も、官邸の中に全くいませんでした。本当にいないのです。

私は大学を卒業して数年間、ガラス製造会社に勤めておりまし

水素爆発

三月十二日から十五日にかけて、福島第一原子力発電所一号炉から四号炉が水素爆発を起こした。一号炉で水素爆発が起きたのは、ジルコニウムという金属でできた燃料被覆管、燃料を入れるさやの温度が八五〇℃以上になり、水と反応し、水素を発生させたことによると考えられる。

【参考】『原子力・核問題ハンドブック』（和田長久・原水爆禁止日本国民会議、二〇一一年、七つ森書館）。『小出裕章が答える原発と放射能』（小出裕章、二〇一一年、河出書房新社）。

た。ちょうど公害が社会的な問題になった一九六〇年代末、つまり、日本が高度成長を始めて、オリンピックを開催した三、四年後に、高度成長のツケとして公害問題が起きていたときでした。東京・御茶ノ水のあたりの外堀、神田川には真っ黒の水が流れていたり、子どもたちが小学校の朝礼中に光化学スモッグの影響でバタバタと倒れる、という公害問題が起きてきました。これは、当時の高度成長の製鉄会社や石油会社——私が勤めていたガラス製造会社はテレビのブラウン管を作っていたのですが——そういったところは亜硫酸ガスをたくさん出すのです。ガラス会社でも石油を燃やして窯を温める、という鉄を溶解するときと同じようなことをします。質の良い石油を使っているので真っ黒の煙ではないけれども、三十メートルの高さの煙突から亜硫酸ガスが出ています。硫黄分の混じった石油の亜硫酸ガスが飛び散ることによって光化学スモッグを引き起こし、大気を汚染していくのです。

もちろん工場の周りに住んでいる人は、三十メートルの高さから出ている煙がどの辺に落ちるのか、まずそれを心配します。当時、私は総務課でただ一人の公害担当だったわけですが、いろいろ研究

したところ、三十メートルの高さから出ている煙は、基本的にその高度では常に吹いているそよそよとした風に乗って、だいたい五十キロメートル先まで行き、霧散するのではなくストンと下に落ちる。これがホットスポットです。私の会社は千葉でしたが、どの辺に落ちるかというと、東京都内に落ちたり、水戸に落ちたり、ともかく五十キロ先に落ちることが分かった。すると、福島第一原発で水素爆発が起こり、飛散した放射性物質が落ちるのも十キロ、二十キロ先ではなく、五十キロ先にストンと落ちる可能性がある。むしろ、亜硫酸ガスより放射性物質のほうがはるかに軽いですから、八十キロ先などに避難地域を設定しなければいけない。そういう問題が起きてくる、と考えました。

原発事故の三日後の三月十四日、私に会いに来るはずだったイギリス大使館の政治部長が「休暇が長引いて帰って来れない」と電話してきました。悠長なことを言っていると思ったら、違うのです。大使館員がみんな逃げてしまったのです。米軍基地もほとんどの人を避難させたようですが、アメリカは三十数年前のスリーマイル島の事故のときには八十キロ圏内はすべて避難しなさいと指令を出し

ていますから、今回の「3・11」のときにも八十キロ圏内にいるアメリカ人を避難させました。それどころか、アメリカ海軍は二百キロ圏外に避難しなさい、と指示しています。二百キロというと、原子力空母の「ジョージ・ワシントン」などが停泊する、アメリカの第七艦隊の母港である横須賀も圏内に入ってしまうです。ですから、東京の大使館はもちろん、海軍は横田基地、横須賀の第七艦隊まで避難させるといふ決定を一度しています。しかし、横須賀の基地から海軍の軍人がすべて逃げたとなると、将来的に日米同盟が崩壊する政治決定になる。それでは大変だから横須賀は避難しないことに変更したということです。

そうした状況の中で、私が官邸の中で具体的に考えたのは、単に、同心円状に、三キロ、十キロ、二十キロと避難区域を広げていくだけのやり方はおかしい。放射性物質が五十キロ先に落ちるか、八十キロ先に落ちるか分からないけれども、風向きを調べてみれば適した避難方法が考えられるはずだということです。

ところが、わたしのみならず、枝野官房長官のところにもさえ、データが来ません。文科省は持っていたことが後で分かります。放射性

物質がどの方向に向かって飛ぶかというシミュレーションのモデルを作れる SPEEDI（スピーディ）（*）という機器があったからです。しかし、その情報を出せばパニックが起ころうとか、あるいは文科省がそれを出したという責任を問われるということ、全部それを隠蔽するのです。日本気象学会の会長などは学者に、「あなたたちはデータを持っているかもしれないが、それを出してはならん」と会員にメールを送り発表させませんでした。

さて、皆さんは、私の名前で思い出す新聞記事があると思います。三十キロ圏外がその大部分である飯館村のホットスポットに、京都大学原子炉実験所、熊取六人衆（*）の一人である今中哲二助教が数値測定に行った結果、原発事故から一カ月後の四月十一日の段階で、飯館村の土壌から一平方メートル当たり二千二百キロベクレルのセシウム137を検出し、人が住むのに適したレベルではない、と発表しました。これはチェルノブイリにおける強制移住基準の千四百八十キロベクレルをはるかに超える数値です。そういう情報は、配下の官僚が一人もいない私のところに内閣からは入ってきませんが、他のところから入ってきました。そして、翌四月十二

SPEEDI（スピーディ）

放射能の影響を予測するシステム。放出された放射性物質がどう広がるのか、風向きや風速、地形を計算し、飛ぶ範囲を予測する。震災当時、文部科学省はほぼ正確に高汚染地域を把握していた。

【参考】『プロメテウスの罠』（朝日新聞特別報道部、二〇一二年、学研パブリッシング）。

熊取六人衆

京都大学原子炉実験所の六人の研究者、小出裕章氏、今中哲二氏、川野眞治氏、小林圭二氏、海老沢徹氏、瀬尾健氏の諸氏は、「原子カムラ」の利権集団から「熊取六人衆」と名指しを受けてきた。同実験所は大飯府熊取町にあるため、原発反対を貫いている同実験所の研究者にこのような異名がついた。

【参考】『「熊取」からの提言』（小林圭二編、二〇一二年、世界書院）。

日には、原発事故の評価（*）が史上最悪のレベル7になりました。日本政府と東電はずっとレベル5で抑えたかったのですが、実際はそんな状態ではなかったのです。チェルノブイリでは二十七年経った今でも居住禁止区域になっているわけですから、私は四月十二日の朝に菅首相と話をして、飯館村では高い数値が出ているのだから、すでに一カ月経ってしまっただけで、こういう場所に人を住まわせておくべきではないと提言をしました。「十年住めないのか、二十年住めないのか分からない」という新聞報道は、そのときのことです。福島第一原発の周辺には、たくさんのホットスポットができていることを報告して、移住、少なくとも緊急避難をさせておくべきだと言いました。しかし、飯館村では村長が涙を流して、住民を外に出せば村がつぶれるからと抵抗し、実際に全員がいちおう退去したのは、「3・11」から四カ月経った七月のことでした。

そのときの方がメディアで取り沙汰されました。ふるさとを棄てるような、そんなひどいことを言ったのは、松本の発言か、それとも菅首相の発言か、という取り上げ方でした。少なくとも合意をしたうえでのことだったわけですが、首相は「俺が言ったんじゃない

原発事故評価

国際原子力機関（IAEA）と経済協力開発機構原子力機関が、原子力発電所などで発生した事故や故障などの影響の度合いを簡明かつ客観的に判断するために策定した「国際原子力事象評価尺度」の評価尺度。「安全上重要でない事象」の「レベル0」から、チェルノブイリの事故に相当する「重大な事故」の「レベル7」までの八段階に分ける。茨城県東海村のJCO臨界事故は「レベル4」、スリーマイル島事故は「レベル5」であった。

【参考】『小出裕章が答える原発と放射能』（小出裕章、二〇一一年、河出書房新社）。IAEAホームページ（<http://www-ns.iaea.org/techareas/emergency/ines.asp>）。

い」と言った。私は、ひどい状態になっているから、そこから人間を救い出そうと、そういうふうに見えるのが政治だろうと思っておりますし、問題はどちらが言ったかではありません。実際にひどい状態にある福島をどうしていくか。そして、福島原発の事故だけではなく、海岸線に住んでいる人を内陸や高台に住まわせる方法を考えられないのか。そのことを三月十八日の段階で私は復興ビジョンとして提出しています。官僚も学者も東日本の海岸線がどうなっているか、誰も知らないから一律に、大規模での漁業の復興を図っていくこうとする。それに対して、漁業のところ、農業のところ、福島の原発のところでは、それぞれ復興計画が違うはずだということを問題提起したかったわけです。

◆ 政治をどこまで動かせるのか!?

四月十二日に作られた復興構想会議で集められたのは、ほとんど学者、あるいは名前のある文化人です。復興構想会議を作ったときには防衛大学長の五百旗頭真さんが議長を務め、副議長は東大の御

厨貴さんでしたが、今だから内情をお話ししますと、最初に候補に上がったのは東大の総長を務めた小宮山宏さんでした。しかし、それはダメだとなりました。個人批判をするつもりはありませんが、小宮山さんは実は東京電力の監査役なのです。ということは、きちんと管理が行われているのか、外部電源が喪失したときにはどうするのか、事故が起きた際にどのような処理をするのかということも含めて、お金の使い道や人員の配置の仕方を監査する役目だったわけです。そのための給料ももらっているわけですから。

そのところは民主党ははっきりしていて、利害関係者を会議の議長にすることはまずいと考えました。そこで、小宮山さんが候補から消え、次に挙がったのが、小宮山さんの前の東大総長である佐々木毅さんです。ところが、佐々木さんは原子炉メーカーである東芝の社外取締役で、これもまた利害関係者ということで、やはりダメになりました。その前の候補には、国民に復興をこういふふうに行きますと知らせるためには、できるだけ名前があって、大きな組織を持っている人がいいということ、日本テレビの社長である氏家齊一郎さんが挙がりました。実際には、この方はその一年半後

に亡くなりました。その後にも、マスコミ関係の方が挙がったのですが、その方も八十五歳ぐらいでした。でも、最終的にはそういう方々に頼むような問題ではないだろうということで、議長は五百旗頭さんに決まったわけです。

会議メンバーのメインは学者でしたが、そのなかに宮城県知事もいました。知事ですから、仙台以北の塩釜や石巻などの大きな漁港のことは知っていますが、小さい入江での小さい漁業に関しては、すべて集約し大企業の大規模漁業に変えていくという案を出しました。それが実際に今通っています。でも、それはおかしいと、官邸の中にいた私は助言あるいは批判をしていました。しかし、政治というものは、簡単に動くものではありません。皆さんも思い出していただと分かると思いますが、「3・11」のあとには「普みたいに、あんなスタンドプレーばかりするヤツに任せていられない」「官僚をもっと使える人に変えていかなければいけない」というように、民主党の中でゴタゴタが始まりました。自分にやらせろという人も出てくる。

すると、こんな大事な時期にそんなまとまりのない「野合」の民

主党に政権を任せておけない、ということでは自民党からは政権を譲り渡せと政争が始まります。こういう党内闘争や政権を争う政争が始まると、政治家は国家や国民のために何が正しいのかという判断を棄てて、どちらが勝つかに走ってしまふ。「原発事故は終結した」という言葉の綾だけで、実際には誰も復興の計画を進めようとはせずに、事故への対応や復興が遅れました。

福島第一原発の吉田昌郎所長にしても、あるいは現場で放射能の被害に苦しみながら、わずか五分だけ働き、外に出るということを繰り返していた作業員たちにとっても大変です。学者も官僚も現場を知らない。しかし、最終的には政治が動かすしかない。でも、その政治が動かさない。この平和文明会議でも、「平和」という言葉を入れることにおいては、われわれがこの会議で理念を言えば済むのか、それとも現実の政治を動かしていくところまで考えようとするのかが問われるだろうと思います。

実は、私が内閣官房参与になったのは、民主党の仙谷由人が大学のときの同級生で、およそ五十年來の友人だったからです。しかし、自民党総裁を務めていた谷垣禎一も同期で、隣のクラスだったわけ

です。ですから、官邸にいるからというわけではなくて、政治というものに、拒否感も含めて深い関心があるというか、どういう状況で動いているのかは常に関心を持っていました。そういう私に、民主党の議員たちを相手に、歴史、特に日本が戦争に入っていく近代史を教えてほしいという依頼があったのが参与に就任する伏線でした。今の政治家の水準はかなり劣化しています。選挙の度に、四百人のうちの百人は必ず素人の新人になっています。小泉ブームの場合もそうですし、小沢一郎さんが選挙を仕切って大勝したときも百六人の新人がいました。安倍晋三さんが昨年末の選挙で大勝しましたが、そのうちの百数十人は新人議員です。スーパーマーケットに勤めていたからいけないというわけではありませんが、新人議員の中には政治家としての基本的な教養を持っていない人がものすごく多い。一例を挙げると、小泉内閣のときに選挙に勝って当選した若い女性議員が先輩の議員に対して、「先輩、日本はアメリカと戦争したんですか？」と聞いたそうです。これが国会議員なのです。

自民党の古い時代の良さも悪さも派閥にあるわけですが、派閥と
いうのは一種の教育機関でもあったわけです。どういう法律がある

か、最低限、日本の近代史はどのように進んできたかということなどを党で教育してきたのも今は昔、自民党でもほとんど教育できなくなっています。民主党もできていなかった。そのために民主党議員に対する歴史教育を私が依頼されたのです。

先ほどお話した女性議員は、日米間で戦争があったことも、日本が負けたことも知らなかったのですが、これは戦後の教育に問題があります。特に、今、アメリカと戦争したことは知っていても、中国と戦争したことは知らないという国会議員がものすごく多いのです。そして、それが侵略戦争で、それに対して謝罪をしたい、そういう歴史認識のない若い人が多い。ですから、民主党の議員だけには少なくともそのぐらいの教育をしてくれと頼まれたので、この五年ぐらい引き受けていました。そのことが参与になる伏線となり、東アジアの外交と東アジア共同体構想を考える役目を引き受けることになったわけです。官房長官の枝野幸男さんや、国家戦略担当大臣の古川元久さん、環境大臣の細野豪志さんなどは皆、私の歴史の教え子たちでした。

消えた「原発ゼロ三原則」の閣議決定

さて、もう少し問題を掘り下げていきたいと思います。

福島第一原発の事故が起きてから、一年半経った二〇一二年九月六日、まだ民主党政権の時代ですが、菅内閣が終わり、野田政権に なっていたので、私は内閣官房参与ではなくなっていました。その 段階では国家戦略担当大臣の古川さんから電話で呼ばれて、内閣と して「原発ゼロ」という方針に決定したいのだが、どういう内容を 決定したらいいかという相談がありました。もちろん、その前に下 相談をされているわけですが、そのうえで私に改めて相談をしてき たのです。基本的な路線は古川さんが考えていたこととほとんど同 じでしたが、しかし、きちんと国民に伝えるためには、三つぐらい に方針を絞ったほうがいいと助言しました。はっきり分かりやす く「原発ゼロ」と言う場合にも、具体的に三つ示すべきだと。自民 党の時代から、四十年経ったら廃炉にするという大まかなルール自 体は決まっていたようなところもありました。ところが、それをま だ事故が起きていないからいいだろうとずるずると延ばしてしまっ

た。部分的に補修をすれば、その部分は新年度ということになるわけで、そうやっている補修をしてきていますから、四十年たっても全体が新しくなっているようなものだど、自民党の場合は説明してきたのです。でも、それではダメだと思ったのです。

私が提言した具体的な三つとは、第一には、四十年廃炉ルールを厳密に守る。二番目には、日本のように地震や津波や火山の自然災害の危険性がある国では原発を新規につくらない。そして三番目には、危険性のある立地、例えば浜岡原発（*）のようなところは即時に止めたほうがいい、と。日本の原発はだいたいが海岸線にあります。それは人があまり住まないような過疎の場所であり、それから、事故が起きたときには大量の水で冷やす必要があるためです。すると、福島第一原発、第二原発があるような、産業としては農業も漁業もなかったような浜通りの、なおかつ五十メートルや三十メートルの山を削ってつくった場所にある原発は、二〇三〇年ぐらいまでに、順次廃炉にしていったら、結果として、二〇三〇年までにはすべて廃止する「原発ゼロ方針」を策定しようとしたわけです。徳山理事長はこれでは遅すぎると言われるかもしれませんが、政治

浜岡原発

中部電力が所有する静岡県御前崎市所在の原子力発電所。一九七六年から運転開始。同発電所の立地は、想定東海地震の震源域のほぼ中央にある。浜岡原発の原子炉は津波がくる前に、大地震のエネルギーによって壊滅的な被害を受けると予想される。被害の予測、その危険性については『原発はいらない』（小出裕章、二〇一一年、幻冬舎ルネッサンス）を参照。

の領域に入ってくると、それでもまだこれを「二〇三〇年『代』」
というふうに妥協をするわけです。妥協しないと通せない。つまり、
政治というのは、正しいか、正しくないか、ではない。国民の支持
を受けるかどうか、つまり勝つか負けるかです。「原発ゼロ方針」も、
この方針を、閣内や党内で通せるかどうか、勝つか負けるかなので
す。

そうすると、「いや、原発業者のみならず、電力業界、エネルギー
業界の票が欲しいから、二〇三〇年『代』と入れてくれ」という要
求がくる。そうなってくると、自民党になれば三〇年代ルールもさ
らに緩くなるだろうと思います。いや、原則ほとんど再稼働という
ことになるのでしょうかけれども、とにかく昨年九月六日の段階で
は、「原発ゼロ」のための三原則を言いました。

すると、国家戦略担当大臣の古川さんが、枝野さんと相談して、
それでいいだろうということになり、これを閣議決定しようという
ことになった。閣議決定は次の内閣も縛りますから、もし閣議決定
がされていれば実は内閣が変わってもこの原則をなかなかひっくり
返せないのです。ひっくり返すためには、再度政策を作り直すか、

あるいは廃止にして、新しい方針を打ち出さなければいけません。九月六日の段階で、私がそういう指示を出し、それを決定することになったわけです。が、実際にはそうはなりませんでした。

◆ 「日米原子力協定」という壁

いろいろな事情があります。東電の労組から「そこまで厳しくする必要はないんじゃないか」という要求が出てきたり、さまざまなところから雑音が入ってくる。最終的には、どの段階で閣議決定が出来なかったのかという問題があると思いますが、いろいろな伝わってくる情報から私が推測するには、日米原子力協定（*）です。つまり、一つの原子炉はいいとしても、日本政府が勝手に二〇三〇年に原発をゼロにするという方針を決めると、日米共同の原子力協定に違反をするということになると考えられます。原子力、核を平和利用すると言っているけれども、実際にはそこから原発の材料になるプルトニウムなどが取り出せますから、日本が原発をつくるとか、原子力を利用して発電をすることだけではなくて、プルトニウムをど

日米原子力協定

「原子力の平和的利用に関する協力のための日本国政府とアメリカ合衆国政府との間の協定」。一九五四年の第五福竜丸ビキニ事件後、五年に締結。米国からの濃縮ウランと技術の供与を受け、国策としての原子力推進体制が整備されていく法的基盤となった。

ここに保管するか、ストロンチウムをどんなふう処理していくか、といった問題を全部日本単独で決めてはいけませんよ、というのが日米原子力協定です。文科省のホームページを見れば、すぐに引き出せますので一部コピーを持ってきていますが、「原子力の平和利用に関する協力のための日本国政府とアメリカ合衆国政府との間の協定」というのが正式名称で、現行の改定協定は一九八八年七月に発効し、二〇一八年七月に三十年間の有効期限を迎えます。その後も解除通告がなければ継続できるようになっています。原子力の平和利用のための取り決めに日米で締結するというのがその目的とされていますが、原子力発電に用いる原料物質であるウランや劣化ウラン、トリウム、そういうものの細かい規定がいろいろあります。今まで溜まっているプルトニウムはどうするのかなど、残されたままの問題もあります。

放射性物質の半減期間は、例えばヨウ素131ならば、八日ほどで半減しますが、セシウム137は半減するまでに三十年かかる。プルトニウム239の場合は、半減まで二・四万年という期間がかかります。こういうことを官邸の中で知っている人がいませんでし

た。ましてや東大病院放射線学科の学科長が、あの後にどんな発表をしたか。「放射性物質は簡単ですよ。煮沸すればなくなります」。ウソです。放射性物質は消えません。あるいは、消すということもできない。政府は、民主党政権も自民党政権も除染と言っています。が、正確に言うとは除染もできないのです。土をはぎ取って集めて、どこかへ持っていかなければなりません。これを本当に除染と言えるのかどうか、移染にすぎない、という問題もあります。

それから、幼稚園の庭や小学校の屋根が危ないからといって、高圧水流を吹きかけて流すことで「除染しました」と言っているけれども、私は『海岸線の歴史』という本を書いているぐらいですから、どんなふうに川が流れて、そして海に流れていくのか分かります。放射性物質は海に蓄積しているわけです。これでは放射性物質を移動させたにすぎない。そういうことも全く考えずに、高圧水流で流せばいいという発想自体が、まさに現場を知らないし、現実を知らない。

ともかく、政治が「原発ゼロ」を言うならば、日本はもう原発をつくらないのだから、日米原子力協定も廃止していきまますと言わな

くてはいけないのです。法律を変えていくと言わなければいけない。しかし、これをやるならば、日米同盟にも大変な問題が出てくることになります。政治が絡むと、こうした問題がさまざま出てきます。でも、この会議では、そのところを無視して、見ない振りをして議論を進めていくわけにはいきません。

特に、先ほど理事長が非常に力強い言葉で人類の平和と幸福のためには核廃絶しないと宣言されましたが、これを具体的、実務的にやっていくにはどうしたらいいかということにも、やはり言及せざるを得ない。考慮せずにいれば、「学者連中がそういう提案をしてきたが、現場を知らないからだ」と、たぶん政治家は言うでしょう。

私が三月十一日に官邸にいたのは運命だと思った、と言いましたが、実は私は原発について原稿を書いたことがあると思って探し出してみたのが、皆さんのお手元に配布しています三十四年前の朝日新聞に書いた一九七九年九月四日の記事です。チェルノブイリの事故は一九八六年ですから、このときにはまだ起きていませんでした。スリーマイル島の事故(*)は起きていて、現在も封鎖したま

スリーマイル島原子力発電所事故

一九七九年三月二十八日に発生した
米国ペンシルバニア州サスケハナ川
の中州スリーマイル島(TMI)原
発二号炉の炉心溶解事故。

【参考】『原子力・核問題ハンドブック』(和田長久・原水爆禁止日本国民会議編、二〇一一年、七つ森書館)。

まで人が住めないのですが、そういう事故はすでに起こっていました。このときに書いた原稿のタイトルは「一九六四年以後」です。「今年三月二十八日、アメリカのスリーマイル島原子力発電所で発生した事故はその規模やその大きさや問題の深刻さによってわれわれを激しく揺さぶった。科学技術信仰、生産力至上主義を軸にした近代文明を改めて問い直さざるをえなくなったのである」。そんなふうに書いていました。

そのころ私は物理学者の高木仁三郎（*）さんとかなり親しくしていました。実は高木さんは私と同じ前橋の生まれで、彼のほうが少し年上ですが、同じ小学校の校庭で遊んでいたのです。スリーマイル島の事故の後では、「原発モラトリアムを求める会」（*）が発足し、私も発起人の一人になっているということを知り、この文章を見直して思い出しました。怠慢ですね。

政治における「平和」とは何か

当時は、原子力禁止運動が、社会党系と共産党系とに政治的イデ

高木仁三郎（たかぎじんざぶろう）
一九三八年・二〇〇〇年。東京大学理学部卒業後、日本原子力事業、東京大学原子核研究所などを経て、七五年原子力資料情報室の設立に参加、八六年から九八年まで同代表。この間、ブルトニウム利用問題の批判的研究と活動で国際的に高い評価を得る。原子力時代の末期症状による大事故の危険性と放射性廃棄物が垂れ流しになっていくことに対する危惧の念を「最後のメッセージ」に残し、二〇〇〇年十月死去。主著に『ブルトニウムの恐怖』（岩波書店、一九八一年）、『原発事故はなぜくりかえすのか』（二〇〇〇年、同）ほか多数。

原発モラトリアムを求める会

作家・野間宏を中心として立ち上げられた会。アメリカ・スリーマイル島で起きた原発事故（一九七九年）のあと、「最低三年間の原発操業停止」「建設・計画の停止」「資料の全面的開示」などを求め、原発をめぐる賛成派と反対派を含めて全国民的規模での討論を呼びかけ、その上で

オロギーによって分かれるという非常に悲惨な状態で、国民の関心を引き付けることはできませんでした。「原発いる、いらぬ、国民大討論会」などというものが行われて、私も加わりましたが、ほとんど実のある成果はなかった。

三十四年も前にこのような文章を書きながらも、お前もうかうかとしてきたんじゃないかということを考えていました。ですから、この平和文明会議の座長を頼まれて、引き受けざるをえなかったのも、運命だと思っているわけです。

ただ、私が考えるには、固有の名称に「平和」という言葉を入れると、非常に大きな障壁が出てくるということも、政治の現実からお話したいと思います。

平和は正義よりもいちばん大切なものです。正義というのはアメリカのイラク戦争を見れば分かるように、虚偽を含みます。平和の主張は障害があるから避けていくとは言えないわけですが、まず日本における平和の捉え方の問題を押さえておきたいと思います。

日本で言うところの平和は、「武器がない状態」という考えに近いものです。一方、世界で言われている政治的な概念、ものの考え

原発が本当に必要かどうかを決めようと考えた。

方として、ドイツの法哲学者であるカール・シュミットの言葉に、「政治とは友敵理論（*）である」というものがあります。友は誰か、敵は誰かということを見極めて、友と手を結んだり、敵に勝つ戦略を立てるといふ政治的な考え方が出てくるというわけです。日本の場合には、「やつは敵だ」といったときにどう考えるかという点、特にロマン主義者（*）がそうですが、「やつは敵だ。だから殺せ」となります。敵がいなくなれば平和が訪れる、という考えが非常に根強いのです。だから、敵を徹底的にやっつけようとする。大東亜戦争も、大東亜の解放という、ある意味ロマン主義的な戦争でした。自分のところに美しさや正義がある、外は敵であるとする考え方が。だから、敵をやっつけるまで戦うわけです。勝てないとすると玉碎する。ここには、リアリズムがありません。これが日本人の平和創造の観念です。

ところが、近代政治力学、パワーポリティクスをやってきたヨーロッパやアメリカでは、「やつは敵だ。だから警戒しつつ手を握れ。そうすれば平和は訪れる」と考えます。これは不徹底や曖昧とも言えますが、西洋近代の政治は、基本的にこういうリアリズムの考え

友敵理論

ドイツの法学者・政治学者カール・シュミット（一八八八年・一九八五年）による理論。政治の本質を敵と味方の峻別と規定と考えた。

【参考】『バルチザンの理論』（カール・シュミット、一九九五年、筑摩書房）。

ロマン主義

十八世紀末から十九世紀前半にかけてヨーロッパ各地で展開された文学・芸術・思想上の自由解放を信奉する革新的思潮。カント主義や合理主義への反動として生まれた。

【参考】『政治思想論集』（カール・シュミット、二〇一三年、筑摩書房）。

方で平和を考えてきました。だから、「曖昧」と言われることは、別に恥ずべきことではないわけです。

われわれの平和文明会議では、ある意味ではロマン主義的な、自分の中に美しさや正義があるという考え方は必要だと思います。しかし、ロマン主義には危険性があります。美しさを見ようと思ったり、問題の本質を知ろうと思ったら、「目をつぶれ」という精神になってしまう。現実を見てしまえば、汚いもの、曖昧なものが見えてしまうから、自分の美しさ、正義の観念に照らして、これが美しい、これが正義、というやり方を選んでしまいます。

ところが、政治には「現実があるがままに見よ」というリアリズムが要求されます。そこで、敵とも手を握るところは握っておこうという判断が生まれるのです。ですから、「この間まで悪魔のような嫌なヤツだ」と言っているのも、悪魔にも土下座をして手を握ってもらわなければならない時もある、ということを自民党の議員たちは言います。野中広務さんが小沢一郎さんにそれをやりましたけれど、悪魔のような人にも土下座をして、時に手を握らなければいけない。わたしのような本来的にはロマン主義者は政治というのは汚

いと考えますが、しかし、その現実との妥協がなければ平和は訪れない、とも言えるわけです。

すると、現実においては、この会議でロマン主義的な美しさ、正義を求めていく必要があると同時に、それが平和を希求する場合には現実主義（*）のプラグマティズム——実務的にこれをどう実現していくか、理想を持ちつつそれを現実社会の中にどう活かしていくか、そのためにどのような実務的な手段、工作をしていくか——の両方が必要だと思っているわけです。

宇宙の中の「明るい夜」

ここで座長の私の役割として、原子力とはどういうものであり、どういう危険性があり、それを議論して政治にまで影響を与えるにはどういう展開をすべきかということに関して、皆さんそれぞれの考えを聞いていかなければいけないわけですが、私の場合は政治思想史を専門としてきた人間ですから、そういう思想史からの知見を出すということ、あるいは政治との関わりの中で知り得たことと

現実主義

政治的現実主義は古代ギリシアの歴史家トゥキデデスを始祖とし、マキャヴェリや近代イギリスの思想家T・ホッブズの政治思想に典型的に見られる。国際関係論における二十世紀の代表的な現実主義者としては、E・H・カーやH・モーゲンソーなどの古典的現実主義者、K・ウォルツ以降の構造的現実主義者など。現実主義の理論構成として、世界は中央政府の存在しない無政府状態であるため、アクター（行為主体）としての国家の最大の目的は「生き残り」となる。国際関係を基本的に自助の必要性に迫られた状態と見なし、国家安全保障は国際関係の優先課題であると考えられる。また、パワー（軍事力）をこの目的を達成するための重要かつ、必要手段のひとつとする。

現実主義について、及び現実主義からみた平和に関する議論の導入として、『平和主義とは何か——政治哲学で考える戦争と平和——』（松元雅和、二〇一三年、中央公論新社）を参照。

して、文明とは何かということをお話ししたいと思います。

そこで、文明についてお話をするにあたって、大石芳野先生から頂戴した『福島 FUKUSHIMA 土と生きる』という写真集のことをちよつと取り上げさせてください。その解説に大石先生が「明るい夜は文明社会の証」という言葉を出しておられます。要するに、電氣を使って世の中を明るくすること、そして便利にするということ、これが文明社会の一つの証であるとわれわれは思っているところがある。京都造形芸術大学と同じ瓜生山学園の東京芸術学舎では、「3・11」の震災からそれほど時間が経っていないときに「新生会議」(*)を開催されました。そこに私の友人であるアストロバイオロジージャー(*)の研究者・松井孝典さんをおられました。彼は惑星のほうから、あるいは宇宙から地球を見ることがグローバルな視点であると言っています。地球が一つのグローブ(限られたもの・球体・閉じられた系の意味)であるということは、人類が一九六九年にアメリカの宇宙船が月から地球を見た経験から分かったわけです。これがアストロバイオロジージャーの発想のもとだと彼は言います。そこで、地球で起こっている文明を彼はどのように

新生会議

東日本大震災を機に日本再生・地球再生のためのヴィジョンを語り合い、構想するフォーラムとして開催。二十二世紀を見据えたトランスモダン(近代を踏まえ、それを乗り越えるような)文明像を構想する一方、現場での具体的なプロジェクトと直結した運動を目指す。二〇一一年五月に第一回を開催、同年十二月までに六回を開催した。

アストロバイオロジージャーAstrobiology NASA(アメリカ航空宇宙局)が提唱した新たな学問。我々はどこから来てどこへ行くのか、我々は宇宙で孤独な存在かをテーマに、細分化された一つの学問分野としてではなく、生命の起源と進化の解明は、二元論と要素還元主義を超えて、あらゆる知の体系を総合化しない限り解明できないと説く。一九九六年、NASAはアストロバイオロジージャーのプログラムを立ち上げた。

【参考】NASAアストロバイオロジージャー関連ホームページ
(<https://astrobiology.nasa.gov/about->

言っているか。昼間でもだいたい真つ暗に見える宇宙の中で、地球も暗いけれど、その中でもきらきらと光っているところがある。これは全部電気によるものなのですが、これが文明だと言うのです。大石先生の解説にもそれと同じような文章が書かれていたのですが、文明とはそういうものなんだ、ということにわれわれは安住してきたのではないかと問いかけてられています。まさに近代の科学技術で作った電気が、喩えて言ってみれば原子力発電所の電気が文明の象徴なのです。

いろいろなところへ行きますと、日本でも風力発電や自然エネルギー、再生エネルギーで何とかしようという声が聞こえてきますが、そう簡単なことではありません。日本は土地が狭いので海上に風力発電を設置するという記事を新聞で読みましたが、日本の海はだいたい漁業で使っていますから、漁業権の問題も絡んできて、簡単には実現できないでしょう。それから、日本でやっている風力発電の規模では、原発一基で作られる電気を発電するのに、最低百基が必要だと言われますが、そんなものでは足りないはずで

中国が自然エネルギーの風力発電に取り組むことができるのは、

astrophysics)。『宇宙人としての生き方—アストロバイオロジーへの招待—』(松井孝典、二〇〇三年、岩波書店)。

新疆ウイグル自治区のタクラマカン砂漠の入り口に火焰山のような場所があるためです。孫悟空が生まれたところですね。一年中、熱射病になりそうな環境です。砂の砂漠ではないけれども、岩ばかりで草も木もない。そんなところが数百キロも続いています。ウルムチから奥に入ってタクラマカン砂漠までの間で風力発電が数限りなく、万単位の数で設置されているのです。日中、暑い砂漠の方向から一定した風が吹いてきて、夜は逆方向、しかも人が住むこともできない。そういう何百キロもの土地は日本には存在しません。そうした現場も見ずに、太陽光発電や風力発電へと簡単にカーブが切れるものではありません。そういうことも現場を知っているかどうかです。この会議では、現場を見て来られている方が多いと思いますから、現場を見た発言をしていただきたいと思っております。

❖ 新しい文明創造への転換点

地球上できらきらと明るく光っているところが文明であるという見方があることを先ほど述べましたが、文明哲学研究所の中で行う

会議としては、もう少し違った文明観を持つべきではないかと考えます。

例えば、古臭いと思われるかもしれませんが、西郷隆盛の『南洲翁遺訓』に出てくる文明の定義は、東洋哲学、あるいは東洋の知恵を考えた場合、近代文明の中にあるわれわれが取り戻していくべき文明観ではないかと考えます。迂遠かもしれませんが、私はこれら頭の中から取り払うわけにはいかないだろうと思います。夜きらきら光っている明るい場所が文明である、便利などころであるという文明観も確かに存在し、これまではそう信じてきたところもありますが、アメリカの「9・11」同時多発テロ、日本の「3・11」福島第一原発の事故のあと、私たちは果たしてそれだけでいいのか。以下が西郷隆盛の文章です。

『文明とは道の普（あまね）く行はるるを賛称せる言にして、宮室の莊嚴、衣服の美麗、外觀の浮華を言ふには非ず。世人の唱ふる所、何が文明やら、何が野蛮やら些（ち）とも分らぬぞ。予嘗（かつ）て或人と議論せしこと有り、「西洋は野蛮ぢや」と云ひしかば、「否な文明ぞ」と争ふ。「否な野蛮ぢや」と畳みかけしに、「何とて夫（そ）

れ程に申すにや」と推せしゆゑ、「実に文明ならば、未開の国に対しなば、慈愛を本とし、懇懇説諭して開明に導く可きに、左は無くして未開蒙昧の国に対する程むごく残忍の事を致し己れを利するは野蠻ぢや」と申せしかば、其の人口を荅（つぼ）めて言無かりきとて笑はれける』

イラク戦争のとき、アメリカが戦争を行う大義名分は、最初は大量破壊兵器がテロリストにわたっては困るためということでしたが、実際にそういうものはなかったと分かってみたら――初めからなかったことが分かって戦争を仕掛けたようなところもあります。――「イラクはフセインの独裁によって支配されているから野蠻である。文明に逆行している。民主的ではない。中東を民主化し、世界を民主化するためにはまずイラクの民主化が必要である。そのためには独裁者フセインを倒さなければならぬ」と戦争の大義名分まですり替えてしまいました。それは「懇懇説諭して開明に導く可き」という、西郷の文明の立場からは絶対に認められないことなのです。

イラク戦争が始まる二〇〇三年、私は「朝まで生テレビ！」に出

ました。それまでは十年間、「出ない」と言い続けて出たことがありませんでしたが、「お前が出ないと、イラク戦争に反対する人がいないから出てくれ」と言われて出たところ、「絶対にイラク戦争を始めてはいかん」と主張したのは、ほとんど私と戦争反対の平和主義者の小田実さんだけでした。「大量破壊兵器があるから」と言うならば、それがあるといふ証明をしなければいけません。アメリカはそれをフセインに証明しろと言っていました。それはおかしい。向こうは「ない」と言っているのですから。ないことの証明をしると言われても難しいわけです。これは、「無名の師」つまり名義なき戦争だ、そうイラク戦争反対の意見を言ったわけですが、岡崎久彦さんなどは、アングロ・サクソンに従っていくのが正しい選択だと言い、新聞記者や東大の姜尚中さんも「しようがないでしょう」と言っていました。

ともあれ、文明観というのを、ただ単に人間の便利のためにか、電気があって明るい社会がつくれるから、ということだけで、あるいはそうした印象だけで、ものを考えていってはいけないのではないかな。それは、言ってみれば、科学技術というものはすべからず人

類の進歩に結び付かなければならない、という考え方でもあるわけです。近代西洋の科学技術は、人間が自然の力を克服している、乗り越えていける、と考えることによって成り立つ世界観です。そして、その科学技術による近代文明は確かに必要であるとわれわれは思っていたわけですが、「3・11」の大地震や大津波が起きてみると、日本人はもともと「海やまのあいだ」（折口信夫）（*）に住んでいる人間で、東洋とはそういう自然の力を畏怖し、それと共生する文化を有していて、場合によっては「山川草木悉皆成仏」とまで考えて生きてきました。自然は開発してやらなければ人間の役に立たないと言って、自然を破壊してきたのが近代文明であると私は考えています。そういう近代文明自体を捉え直すことが、今や必要です。平和の問題においても、近代文明のままでもいいのか。忘れられた東洋の知恵、自然と共生するような思想を生み出してきた儒教や荘子や老子の中に含まれている叡智を、われわれはもう一度学び直す必要があるのではないかと。そう思っています。

そうしたことも含めて、「3・11」の直後に日経新聞のインタビューを受けた中で、復興計画を提出した私が答えたのが、「同じように

折口信夫（おろくちしのぶ）

一八八七年、一九五三年。近代日本を代表する国文学者、民俗学者、歌人。筆名釈道空（しゃくちようくう）。民俗学、国文学を研究し、民間伝承採話のかたわら、短歌、詩、小説を執筆した。『海やまのあいだ』は、大正十四年（一九二五年）に改造社版の現代代表短歌叢書第五自選歌集として出版された歌集だが、古来、日本人のアイデンティティは「海やまのあいだ」に住まうことで生まれてきたことを象徴的に語るときにも使われる言葉。主著に『古代研究』、『春のことぶれ』、『死者の書』ほか多数。

【参考】『折口信夫』（石内徹、二〇〇三年、勉誠出版）、『折口信夫』（折口信夫、二〇〇八年、筑摩書房）。

再建すれば同じように津波や原発の災害に遭う。漁港に山の中腹から通うような発想が必要である」ということでした。近代文明的に津波を防ごうとすると、海辺にコンクリートの防潮堤や防波堤、田老（たろう）町の場合がそうですが、「万里の長城」と呼ばれた、高さ十・五メートルのコンクリートの防潮堤を二・五キロにわたって築いていました。コンクリートという近代文明の「力」によって、津波という自然の「力」を押し返そうとするという考え方です。田老町とともに有名なのが釜石の防波堤で、海上に出ている部分が十メートル、水深六十三メートルという巨大コンクリートの壁で大津波を防ごうとしました。しかし、波に押し流されてしまったわけです。

この結果には、復興会議に入った科学者は全然反省していません。科学の力は負けたじゃないかと言われると、「いや、防波堤を二十メートルにすればいい」と言う。これでは、根本的な議論になりません。今回の津波は、実際には波高四十メートルと言われていきます。田老町で十八メートルでしたが、そこに二十メートルのものを作ればいいという発想です。実際に今進んでいる計画は十四・七

メートルの防潮堤を作るといふものです。釜石は、六十三メートルの同じものを建設しはじめました。自民党の国土強靱化法案によって、公共事業のお金が出ることになったからです。

原子力発電にしても、地中に埋まっているウランをそのまま置いておけば、人間の文明には全く役に立たないけれども、取り出して原子力発電をすれば人間の役に立つであろうという発想です。これで人間は自然をコントロールしたと考えている。全くコントロールできていないじゃないかというのが、私の反省です。ですから、今回の震災と原発事故を受けて、コンクリートの力によって、あるいは原発の力によって、ますます近代文明を堅牢にしていこうという発想自体を変えていかなければならないと考えています。

つまり、われわれの文明観が転換点にあるのではないか、と考えているわけです。そして、「人類は核エネルギーも含めた近代文明をどう乗り越え、新しい文明をつくっていけるか」ということを私は考えている、というところで私の話を終えたいと思います。

井原 ありがとうございます。

デ
イ
ス
カ
ツ
シ
ヨ
ン

松本 それでは、ディスカッションに入っていきたいと思いますが、一回目ということもありますので、私の話を材料にしてください、まず皆さんのお考えをざっくばらんに述べていただくということにしたいと思います。まず尾池和夫先生からお願います。

尾池 これから議論を進めていくために、やはり私は言葉が大事だと思うので、松本さんの話の中にも出てきた「言葉」というものに少しこだわりたいと思います。

理事長は「学者というのは信用できん」とおっしゃいましたが、学者というのは実に多様です。いい学者もいるし、悪い学者もいるし、御用学者もいるし、俗物学者もいます。それから、海岸や被災した現地を見ていないので、津波の影響を学者は一樣に考えていると松本さんもおっしゃったけれども、御用学者だけを見ているような言い方でした。しかし、多様性の世界でわれわれは議論をしないといけないので、学者にもピンからキリまであるという認識を共通にしておきたいですね。

本当に実に多様な海岸があるのが日本の自然です。私は政府の事故調査・検証委員会の委員をしておりましたので福島第一原発の事故現場を見に行ったのですが、事故原因がよく理解できる場所でした。日本の海岸にはそういうところもあるし、それから、干潟という日本の文化の一つのよりどころになっているところも、今回の地震の影響で一メートル二十センチも沈んで、干潟がなくなってしまうたり、新たな干潟が生まれるという現象も見られます。これが日本の自然であって、形がさまざまとおっしゃったけれども、変動の仕方もさまざまなんです。これがわれわれの地球の特徴である「動くもの」という認識を持つておく必要があります。

ある場所で干潟を守ろうという運動がありました。干潟を守るために堤防は不要であるという運動を展開していました。堤防を作っていないなかったために、ものすごい津波を直接被ってしまったわけだけれども、干潟そのものも消えてしまいました。そうしますと、人間が干潟を守るとはいったいどういう運動だったのか、という根本的な疑問が出てくるわけです。つまり、われわれが生きている日本列島は変動地形であって、さまざまな大地や海の多様性を持っている

ることを知っていなければいけないし、同じような意味で学者も多様な世界で、いろんな学者がいて、われわれの想像を超えたところで考えているような学者もいるということを共通認識として持つことを、私はこの会議では主張します。

それから、もう一つ大事なことですが、「科学技術は自然を克服する」という表現をされましたが、それには私は非常に抵抗があります。これは違うんですよ。科学と技術は全く別物なんです。私は自分のことを科学者だと思っと思っていますが、科学というのはひたすら物を見つめることです。とにかく現地へ行く、観察する、それを記録する、というように徹底的にものを見ているわけです。多少、持つてみたり、触るといふこともありますけれども、とにかくものを見つめるといふのが科学の世界です。

一方、技術の世界は、ひたすら物を壊したり、作ったり、分解したり、合成したりするわけです。それで、新しいものを作る。自然にあるものを壊すのも、技術の世界ではひとつのやり方なのです。そこには、「人の役に立つ」という理論があるからなのですが、その理論で本当は役に立たないものや危ないものも作ってしまうこと

がある。ですから、科学と技術という言葉を一まとめにして、科学技術という言葉を使っはいけない。

理事長が「京都文藝復興」という宣言を出していますけれども、そこには「科学と技術」というように、ちゃんと「と」を入れていくんです。そういうものの考え方をする理事長だから、僕は理由も聞かないで学長をやると言ったんですけれども、そういうものは非常に大事です。新聞のエッセイにも書きましたけれども、科学技術という言葉をやみに使うことは恐ろしいことだと思います。『広辞苑』を第六版まで見ても、科学技術という見出しはありません。共通認識として科学と技術は分けて考える。同じように、学術と芸術も二つ成り立つものとして考えるべきでしょう。「科学と技術」「学術と芸術」というように、それぞれを同じレベルの別の言葉として使うべきだと思います。

それから、もう一つ、文明とは何ぞという話が出てきましたが、これは非常に難しく、私はまだ良く分かっていないのですが、使い方が何種類かあるんですね。

例えば機関車を作るというようなことになると、これが技術とし

ては世界中で車を作ることに応用できるといふグローバルな、国境のないものとして展開されていきます。それによって技術者も育てることになるのですが、文化というのは、この国の文化、あるいは山形の文化、京都盆地の中の文化というように非常にローカルなものです。だから、文明はグローバルで、文化はローカルなもののように、非常に対立的な概念で使う場合が最近が多いんですが、例えば黄河文明、長江文明というときはちよつと違います。ローカルな、そこに発生した文化を言っていることもあります。さらに、技術も科学も学術も芸術もいろいろな文化的要素を含んだうえでインカ文明と使うこともある。つまり、文化と文明を対立させた文脈だけで語ることはできません。

平和文明会議で用いる文明という言葉はいったいどういう意味で使われるのか。平和という言葉も非常に難しいのですが、文明という言葉も一所懸命分析して、共通認識を持っておかなければ、この会議のタイトルそのものがよく分からなくなってくると思われません。

これらは一例であつて、他の問題も根本的なところを議論しながら

ら、整理をしていったほうがいいんじゃないかという印象を受けました。

松本 分かりました。言葉使いの問題をおっしゃられたのですが、やっぱり基本的に言葉の概念を合わせていくというのはなかなか難しいところがあるんですね。

例えば、今おっしゃったことでも、文明と文化というのは違う概念で、私は、文化は文明の下位概念ではないと考えていますけれども、文明と文化は同じ質のものであって、ただ規模が違うだけだという考え方がアメリカなどでは一般的です。サミュエル・ハンチントン（*）という国際政治学者の『文明の衝突』では文明と文化は同じものだという扱いです。文明と文化が違う次元のものであると言っているのはドイツ人くらいなものだとハンチントンは言っています。日本人はどちらかというと、ドイツ哲学の概念を受け入れています。近代の学問をやってきましたから、文明と文化は次元の違い、質の違いのものであると思っています。そういう問題があるわけですから、議論の中で出てくる状況によって、どういう意味で使ったの

サミュエル・P・ハンチントン
アメリカの戦略論専門家。一九二七年・二〇〇八年。一九七七～七八年に国家安全保障会議の安全保障政策担当のコーディネーターを務める。
著作の『文明の衝突』で冷戦後の世界における対立の構図として、イデオロギーよりも宗教などの文化と文化的なアイデンティティ、すなわち最も包括的なレベルのアイデンティティが、冷戦後の統合や分裂あるいは衝突のパターンをかたちづけているとした。しかし、著者の文明設定が恣意的で曖昧である、世界各地の文化についての間違いや誤解があるとの批判や意見も少なくない。
【参考】『文明の衝突』（サミュエル・P・ハンチントン、一九九八年、株式会社集英社）

かが伝わるだろうと思っております。

尾池 今のお話と重なってしまいましたが、翻訳の問題も考えておかなければなりませんね。各国語で文明哲学研究所の紹介を描くという提案をしましたが、翻訳に当たっては民族による概念の違いもよく検討しながらやっていかないといいけません。この会議から世界にメッセージを発信していくときに、常に気を付けておかなければならないことですし、この会議がそういう言葉の概念も真剣に議論しているんだということそのものも世界に伝わっていくべきであろうと思います。リアルタイムで会議の内容を公表すべきだと思われるのも、そういう意味です。

松本 分かりました。もう一つだけ「学者」ということについて言いますと、戦争中に九州大学の医学者がやったことですが、人間の血液と海水は塩分濃度がほとんど同じだから、それならば、戦地で傷を受けて輸血をしなければいけない人がいた場合、海水を利用して何パーセントまで体に入れて生き延びさせられるかという実験を

しました。人間としては恐ろしいことだけでも、学者だったら絶対にやりたくないと私の大学時代の先生は言っていました。御用学者でなくても、学者は純粋にここまで実験してみたいものなのですね。

尾池 そこが技術の学者なんです。先ほど言ったように科学者はひたすら見るだけ。そこが違います。実験を試みたくなるのは、私たちの役に立つかもしれないという概念があって、そこに技術者としての興味が加わるからだと思います。

松本 テクノロジーの語源はギリシャ語のテクネですが、これには美という意味もあるんですね。すると、美つまり芸術と技術がもととは同じだという側面がある。そうしますと、現代の科学技術文明をテクネ、つまり美という側面から照らしてみると、芸術観の問題にもなってくるだろうという気がします。

尾池 そう。アートを芸術、美術と訳している人もいるわけですが、

翻訳の問題はかなり気になりますけれども、これは概念の話になつてきますね。

尾池 いや、その基本的なところで、学者と学者でないもの、と言われるのが困るわけです。学者への不信感がすごいのは、よく分かっています。私は、原子力工学の学者たちに対して、ものすごい不信感を持っています。それは原発の事故を調査に行って、こんなにひどいとは思わなかった実感があるからです。科学者はひたすら見ると言いましたけれど、科学者として観察した結果、そう思ったわけ

です。市民が抱く漠然とした学者に対する不信感というよりは、もつともっと中身が分かったうえで、の強烈な不信感です。市民が見て「学者はけしからん」という、そういう言い方ではないものがあるんだということを知ってほしいという意味もあります。非常に専門分化して、この分野はこんな間違いをしている、この分野は全然分かっていない、そういう見方をここの会議ではちゃんとしていかなないとやっばりまずいと思います。

松本 原発事故のようなものが起きてみると、国民のほとんどが、確かに原子力研究者というか、学者は全くいい加減だなと思ったし、それが実体として見えてしまった。それまでは学会の中で「あいつ変なこと言っているよな」という相互批判ぐらいで済んでいたものが、全体として国民に、アカデミズムの実態が見えてしまったって、非常に軽視されるきっかけになったのも、あの「3・11」の事故だったという気がします。

秋山さん、引き続き何かありますか？

田中正造

日本の政治家。一八四一年、一九一三年。足尾銅山鉱毒事件を告発した政治家。人間の「生存権」を基本とする人権思想の確立、自治の回復とそれに立脚する人民国家の展望、治水研究を行った。田中は、昭和四十五年六月十七日の日記で、「真の文明は山を荒らさず、川を荒らさず、村を破らず、人を殺さざるべし」と記した。

【参考】『田中正造文集』(一) 谷中の思想』(田中正造、二〇〇五年、岩波書店)。



マーティン・ルーサー・キング・ジュニア (Martin Luther King Jr.)

米国プロテスタントバプテスト派の牧師。一九二九年、一九六八年。アメリカ黒人公民権運動（一九五〇年〜一九六〇年代に米国の黒人が公民権の適用と人種差別の解消を求めて行った大衆運動）の指導者。一九五五年、黒人が白人にバスの席を譲るのを拒んで逮捕されたローザ・パークス事件をきっかけに活動を開始。一九六三年、リンカーン記念堂近郊のポトマック川沿いで行った“*I Have a Dream*”で始まる演説は公民権運動の展開に大きな影響を与えた。一九六四年、ノーベル平和賞を受賞。一九六八年、テネシー州メンフィスのホテルで暗殺される。公民権運動の指導者は他にマルコムXなどがある。

松本 今おっしゃったように、正義という概念があまねく行われているから平和だ、という考え方が確かにありますね。それに対抗する形で、ロシアでは共同体と平和が同じ言葉であるというお話をした。中国や日本の儒教にも、人間にとっていちばん必要なのは「中庸」(*) であるという教えがあります。正義を強調すると、相手を排除するという考え方になって戦争を引き起こすと危惧しているわけです。中庸なんてどっちつかずで、足して二で割る「中道」と同じではないかと誤解されがちですが、その、右にも寄らず、左にも走らず、心の平安を保つことこそが文明の理念というふうにも考えられる。そのところも、もう一回考え直しながら議論を進めていってもよいだろうと思います。

では、右回りの順番でお願いします。

中庸

中国の儒学における「四書」(『大学』、『論語』、『孟子』、『中庸』を指す)の一つ、『中庸』の中で説かれた。『論語』のなかで、『中庸の徳たるや、それ至れるかな』と孔子に賛嘆されたのがその最初の出版。儒教の伝統として長く尊重された。古代ギリシアのアリストテレスは「メソテース」という言葉でそれを尊重している。アリストテレスは、いかなる学問・技術よりもさらに精密な、さらにすぐれたものであろうとするならば、「中」を指すものたるのでなくてはならないであろうと説いた。

【参考】『大学・中庸』(金谷治訳注、一九九八年、岩波書店)、『ニコマコス倫理学(上・下)』(アリストテレス、一九七一年・一九七三年、岩波書店)。

田口 私は、フィールドワークを仕事にしてきて、この三十年間、実際に現場に行く旅を重ねてきました。松本先生のお話を伺って、まず思ったのは、現場のことが分からないから考えられないのなら、分かる人を連れてくればいいだけのことだと思えます。ただ、そういうシステムが政府中枢にできないところに問題があるのであつて、官僚や内閣の人間に地域のこと分からないというのは、致し方ないことだと思ふんですね。分からないことを素直に分らないと表明することが重要で、分からないことを分らないままに放置しておく、その体質がやっぱり全ての根幹にあるのかなという気がしています。今や二世議員が多くを占める政府にあつて、地域を掌のように知っていると自負できる方がどれくらいおられるのか、年に数度しか地域で過ごさない人々に、震災が起きたから速やかに対応しろ、というのは土台無茶な話かと思えます。

私は茨城県東海村の出身です。私の家から、東海原発の二号炉の炉心まで二・五キロしか離れていません。「3・11」のときも東海村にいました、震度6強のものすごい揺れでしたから、当然東海原発は「いった」と思いました。近所の人たちも表に出ていて、放射性

物質が降っているかもしれないと私がアノラックを着て出ていったら、「なんでそんなもの着てきたの？」って。「だって降ってるかもしれないから。モニタリングポスト(*)を見に行くから」と言ってるんです。結局、最も驚いたことは、地元の人が原発の存在を忘れていた、と言ったら語弊があるかも知れませんが、思考から無意識に追い出していると言ったほうが正しいかも知れません。あまりにも日常の中にありすぎて、特別なものとして原発を見ていたら生きていけないし、生活が成り立たない。原発は日常の風景の中に埋没しているもの、それが原発の村に生まれた人間たちの現実であったということです。そういう人間たちが当日、電気もなくなり、水道も止まり、携帯も夜十一時ぐらいまでしか通じなかった。そんなときに、最初に東海村の防災無線が何と言ったかというところ、「今日のニコニコ体操は中止になりました」。「東海原発は無事、冷温停止状態にあります」とか、あるいは「原発の中で、今こういう作業が行われています」とか、そういう放送は全くなかった。これに対して、村民も何人かは怒って役場に怒鳴り込んだという話がありました

モニタリングポスト

大気中の放射線の量（空間放射線量）のうち、 γ （ガンマ）線を連続して測定する据え置き型の装置。戸外に置く検出器と室内に置く測定器からなる。放射線が検出器に当たると、検出器内でかすかな光を発する仕組みになっており、その光を検出・増幅して測定器で放射線量として計測する。

可搬型モニタリングポストとは、通常時の定点における環境 γ 線の測定、緊急時における放射性ブルーム（放射性煙流原発事故などにより飛散した微細な放射性物質が、大気に乗って煙のように流れていく現象）の流れや汚染状況の把握のため、移動車に搭載するなどをして所定の場所に設置し、広範囲な放射線調査を行うもの。広い線量率範囲にわたる線量率データと設置位置データとの収録を行うことが可能。文部科学省は、同可搬型六七五台を福島第一原発事故後に福島県や近隣県に設置したが、実際よりも約一割低い空間線量を測定していたと発表した。

【参考】京都健康安全研究センター

れども、でも現実において、それだけ危機感のない、のんきな空気だったわけです。私のところは百二十軒あまりの集落ですが、実際に地震があった直後にモニタリングポストを見に行ったのは私だけではなかったか、と思います。皆は、津波が来るかもしれないから、川を見に行けと言っていました。でも、実際に川を見に行ったのは私を含めた近所の数人だけ。それで車を高台に移動しました。

どこが震源地か分からなかったけれど、三陸ではものすごいことが起こっていたのを車のワンセグテレビで妻が見ていました。そのときに思ったのは、報道というものには被災地にとって重要なものは全く報じられていなくて、”観客”である被災地以外の人たちが情報として得るものでしかないということです。まさに劇場型災害と言っている。被災地は電話も通じなければ、テレビも映らない、電気も付かない状態で、どこで何が起こっているのかも良く分からない。

福島原発で働いている父親を持つ学生が東北芸工大にいまして、震災が起こったときにどうやって大熊町から避難してきたのか、時系列で全部記憶をたどって追いかけてましたけれど、公的機関からは

ホームページ (<http://monitoring.tokyo-eiken.go.jp/monitoring/sokutei/sokutei.html>)。
日経ビジネスオンライン (<http://business.nikkeibp.co.jp/article/ife/20121126/240015/?t=ncort>)。

何の通達も行われていないんですね。「住民は公民館に集まってください」という内容のアナウンスだけあったと。それで母親と車で公民館へ向かう途中で消防団に会ったら、「原発が危ないらしい、公民館に集まるように言っているよ。車は使いな」と言われた。でも、その学生の母親は不安になり、息子を車に乗せて実家のある米沢まで走った。道が塞がっていたりしたので、どこをどう走ったか記憶にないぐらい必死になって走って逃げたということです。

一九九五年一月に阪神淡路大震災があったとき、東日本の人間が多くは、朝起きてテレビを付けたら、高速道路の倒れた橋脚や黒煙が上がっている市街地の映像が流れていて、当事者ではなくて、どこかで傍観者になって報道を観ていたと思うのです。「大変なことになった」とは思っているんだけど、じゃあ何をするのか？と言われても、何もできない。情報はたくさん来るんだけど、被災地である阪神の人たちに本当に必要な情報は行かなかったのではないかと思うのです。被災していない人々が、被災の詳細な状況を一日中テレビで観続け、当の被災者の方々には何の情報も届かない。それと同じことが今回も再現された。あれだけのことがあった

のに何の学びもなく、この十数年過ごしてきてしまったわけです。

例えば、飛行機を飛ばして自衛隊機がビラを撒くとか、あるいは皆が使えるような無線基地を設置しておくとか、食料や衣類、防寒用具などを落下傘で投下して配給するとか、いろいろなことを当事者として「3・11」になって初めて考えました。そういう教訓、当事者の経験が全く行政に反映されていかないことを、あれから二年以上経ってとても感じています。どこか他人事なのです。

それから、文明の問題というのは、言葉の定義から始まってとても難しいと思うのですが、同じように伝統という定義も難しい。私は極東ロシアに二十年近く通っています。村で狩猟採集民と一緒に猟をしたり、彼らの食料調達法や保存技術などを学んだりしています。日本では「マタギ」と言われるような伝統的な狩猟者と三十年あまりの付き合いがあります。とは言っても今は「ハイテクマタギ」というのもいいのですが、トランシーバーを使い、双眼鏡を使い、GPSを使い、ライフルを使い、高倍率のスコープを使う。狩猟に関わる人たちがこの三十年あまりの間に激減して、何しろ人数がいなくなつて、こうした猟をするしかなくなっていますし、その進歩

した技術が狩猟者の減少をリカバーしているともいえるのです。そういう中で、伝統的な技術や考え方、倫理を受け継ぐ人がいない。私は「文化継承リスク」と呼んでいます。経験と倫理観のうえに継承されてきた、人々の伝統的な知と技術が急激に劣化しつつある。伝統的な技術というのは、地域で幾世代もかけて鍛え上げられてきた経験に根ざした技術のことで、それは身体化された文化といえるものです。

ご承知のように、近年クマやイノシシなどの野生動物の出没問題が取りざたされていますが、このような状況に対して行政は困って、クマなどを確実に獲るために檻を使うことを許し続けています。檻の中にハチミツを置けば、確実にクマが入ってくる。技術や知識はいりません。檻を組み立てて、ハチミツを置いて、放って置けば、その日のうちにクマが入る。それを有害捕獲と称して檻で生け捕りして、最終的には射殺しないといけない。あるいは、捕殺せずに行う方法もあります。奥山放獣といって森林帯の奥地にクマを放獣するという方法ですが、これも専門家の技術がいるんですね。クマが檻にかかって捕獲されたら、クマに麻酔を打って体を計測す

るなどデータを取って、その後の行動データを取るためのGPSなどの調査機器を装着する。そして、その場所で目撃めたときにカプサイシン入りの強烈な唐辛子スプレーを噴霧する。「ここは嫌な場所だよ」と出没した場所を嫌うように教育して、二度と来させないようにするためですが、その後奥山へ檻ごと移送して放すわけです。これらはすべて人間の技術が劣化したことによるものなんですね。人々は伝統的な手法や考え方を文化財であれば崇めますが、自分たちの日常の中にあって当たり前であった伝統的な知識や技術に対しては全くといっていいほど関心を持ちませんでしたし、評価することもなかった。しかし、それが途絶えてきましても、その役割や需要は存在します。でも誰かがやってくれるだろう。自分がやる必要はない、ということになる。そこで、何の知識もない人でも野生動物が捕獲できる道具に飛びつき、これを乱用することになる。つまり技術的劣化は大量捕獲せざるを得ない状況を作り出すことになる。誰でもできる簡単なものの普及は、それをどのように機能させるかという人間の側のコントロール能力が試される。そのコントロール能力という問題において、クマと原発の事例は極めて類似し

ているなと思います。また、野生動物の放射能汚染についても問題が山積されている。野生の生命は、原発のまさに犠牲になっている。私たち人間は少なからずその恩恵にあずかっていますが、彼らはただ生きて行こうとしているだけで傷つけられている。そこに、人間中心の原発議論ではなく生命中心の議論へと私たちが向かわなければならぬ使命を感じます。このようなことが日常の中に溢れていて、本当に知らなければいけない情報があまり世の中に回っていない。そういうことを深く感じています。

松本 日常の中に原発がある、そういう風景が当たり前になってきたとおっしゃいました。そのなかで原発事故当日、緊迫感のない「ニコニコ体操は中止になりました」という放送が流れたとのことですが、その「なりました」というのが、現代日本の思想のいちばん根幹にあるものだと思います。つまり、「駅は右側通行になっています」とよく言いますが、本当は「右側通行にしています」なのです。あるいは、「警察がこういう法律によってこういうふうにしています」と言うべきところを、全て「なっています」

とする。これはなぜかという点、絶対に責任を取りたくないからです。誰かが「私の責任でこう決めましたから」「署長の責任でこう決めましたから」と言ったら責任問題になってしまふからです。「なる」ということと、「する」ということが、日本の伝統的思想と西洋近代思想との基本的な違いであるし、無責任という問題が日本の思想の欠陥であると、丸山眞男（*）さんの『日本の思想』に書いてあります。ただ、官僚は政治的に無責任であることが倫理的である、というマックス・ウェーバーの『職業としての政治』に書いてあります。その意味では、無責任を日本の思想全体に普遍化はできないような気もする。

では続けてお願いします。

奥本 圧倒されています。松本先生のお話を伺って、皆さんの議論を伺いながら、私がどんなふうに関心を持ってこれに絡んでいけるんだろうと思っているところです。なので、ちょっとつぶやきのようなことになりませうけれども話をしてみます。

私は平和学を研究していて、実践の中で理論を形づくっていき

丸山眞男

戦後日本の思想をリードした日本の政治学者、思想家。一九一四年、一九九六年。一九四六年、『世界』五月号に『超国家主義の論理と心理』を掲載。「戦後日本社会科学の精神的起点の一つ」と表され、影響を与えた。同作は、その後の天皇制分析の出発点となった。

【参考】『丸山眞男セレクション』（丸山眞男著、杉田敦編、二〇一〇年、平凡社）。

いと思つて、「ピースワーク」「平和ワーク」あるいは「紛争ワーク」というような形で自分の仕事や関連の分野を捉えているんですけども、そこで芸術のさまざまな形を、あるいは要素を、アプローチとして導入するということを考えています。

平和に関していくつか思っていることをお話しさせていただくと、平和というのは非常にダイナミックなものであると思います。一般的に平和という言葉を使うときには、「平和が来る」、あるいは、すごく静態的な意味として捉えることが多いと思うのです。状態あるいはそれ自体がダイナミックな活力のある有機的な実体というふうには一般的な認識としては捉えられないと思うのですが、平和そのものというのは、常に批判をしながら、自らを省みながら、常につくり上げていく、そのプロセスそのものことだろうと考えています。

その際、キーワード、キーコンセプトになるのが、紛争、一葛藤、対立と言ってもいいと思いますが一つまりコンフリクトだろうと思うのです。紛争解決、紛争転換、紛争変容と言ったりしますけれども、平和学の中でも紛争に関する問題解決の分野では、コンフ

リクトというのは、色の付いていないものと言いますか、自然の現象であると捉えます。個人のレベルでも、グループ同士の対立であっても、国家レベルであっても、さらに大きなイデオロギーや宗教といったものの対立においても、さまざまな関係性の中で、違いというものがあり、状況が変わったり、同じ人でもその日の気分が違ったりということがあり、そのことによってコンフリクトが生じること自体は当然だと考えます。紛争とは、とても自然な人間関係における現象であるというのが前提となっています。

この紛争をどのように扱うかがポイントで、平和学から見ますと、下手に扱うと、その先にさまざまな暴力的な状況が起こるので、それを上手に活用して、紛争、コンフリクトを一つのチャンスと捉えて、それを変容していく、転換していくというところに、平和ワークの味噌があるのではないかと言います。そんなことを思いながら、先ほどの「平和」についてのお話を考えていました。

平和の対概念として暴力ということが出てくるわけですが、暴力をできるだけ予防し、削減していく、あるいは撲滅していくプロセスの中で中心になる軸が、コンフリクトを平和的に扱う、非暴力的

な手段で扱う、ということ。だからこそ、平和というのは、ずっとコンフリクトに付き合っていく中で、それを機にこの社会や関係性の中にどう反映させていくかという意味でもダイナミックなものであると考えたいと思っっているんです。

それを実現するために、さまざまなアプローチがあると思いますが、アートを使うということが、一つの大きな鍵になるような気がしています。私は、もともと英文学をやっていましたので、文学とか、演劇とか、その他のアートの形を考えるんですけども、例えば、先ほど分かりやすく説明してくださった「敵」という大前提に関してもアートが有効であると考えます。紛争転換の発想からしますと、敵そのものを克服すると言いますか、勝つ、負ける、あるいは敵をつくるということをどう克服できるかというところに関心があります。そこにアートが関わっていくのです。

稚拙ではありますが、私なりに今考えられることは、新しい文明をつくるということであれば、「敵」という発想をどのように克服するか、あるいは敵を人間化する、ヒューマナイゼーション、あるいは再人間化するようなことにチャレンジしていいのではないかと

フォーラム・シアター

ブラジルの演出家アウグスト・ボアールによって考え出された。最初に、解決策がわからない社会的・政治的な問題が含まれている話題を参加者から募り、ドラマ化して上演する。問題の状況を皆で共有したあと、再び同じ劇が演じられるが、今度は提案や別の選択肢を思いついた観客が、途中で劇の進行を止め、演者を交代して演じる。この方法で、さまざまなアイデアを出し合っており、実際に試していく手法。

【参考】環境省、協働による持続可能な地域づくりのための手法・ツール集 (http://www.env.go.jp/press/field_view.php?serial=12179&hou_id=10223)。『被抑圧者の演劇』(アウグスト・ボアール、一九八四年、株式会社晶文社)。

イメージ・シアター

参加者がイメージや場面を表現するためのエクササイズ。参加者が他の参加者の体を用いて、自分の現在の状況、理想的な将来、そして現在の状況から理想的な将来までの過程を

考えます。しかし、もちろんそれは、例えば、暴力の被害者に対して無理やり「和解」を押し付けるものではないし、無条件に加害者の責任を問わないということではありません。

私が関わっているいくつかのアプローチには、フォーラム・シアター（*）、イメージ・シアター（*）、プレイバック・シアター（*）とか、演劇の中で使われる状況を転換していく方法もあります。また、プロセス指向心理学（*）の創始者であるアーノルド・ミンデル、エイミー・ミンデル夫妻によるプロセスワークという方法からも学びたいと思っています。もともと私はトランセンンド（紛争転換）というアプローチから平和学の世界に入ったので、そういうアプローチもあるだろうと思います。さまざまなことを世界中で実践的にやっている人たちが、特に紛争が激化したアームド・コンフリクト（暴力）になった状況で実践している人たち、あるいはアームド・コンフリクトが終わった後に和解や平和構築の仕事をしている中で起こっている実践的なものから学びつつ、それをどのようにに理論化するか。私の実感を伴うこの世界の中でどう繋げていけるかということを考えながら、議論に加わっていかうと考えています。

表現する手法。

【参考】環境省、協働による持続可能な地域づくりのための手法・ツール集 (http://www.env.go.jp/press/field_view.php?seria=12179&nou_id=10223)。

プレイバック・シアター

一九七〇年代半ばに米国のジョナサン・フォックスによって考案される。観客や参加者が自分の体験した出来事を語り、それをその場ですぐに即興劇として演じることで分かち合う手法。

【参考】NPO法人プレイバックシアターらしんばん (<http://playbacktheatre.jp/index.html>)。

プロセス指向心理学

（プロセスワーク）

プロセスワークとも呼ばれる学際的なアプローチ。言葉だけでなく身体感覚や動作を含めた心と体の全体性やものごとの流れ（プロセス）を重視する心理療法。現在では、心理学の枠組みをこえて、より豊かな人間関係や集団・組織の創出をめざすファシリテーション技術としても注目を

松本 ありがとうございます。では、宮島さんお願いします。

宮島 松本先生から、非常に具体的な政治的なアプローチについてお話がありました。今まで考えてもみないようなものだったので、なるほどと思いました。ただ、私たちがいきなり政治的なアプローチを仕掛けたときに、この文明哲学研究所の平和文明会議がどういう状況に追い込まれるかと考えると、やはりまず尾池学長も言われたように言葉や定義に関する議論を深めていくこと、そして松本先生がおっしゃったように私たちの文明観や平和観をまずしっかりと固めていくという、両面の展開が必要なのかなと感じました。そのうえで政治的アプローチということになればいいと思いますし、すべきだと思います。

僕の専門はもともと芸術のほうなので、先ほど奥本先生がおっしゃったように、平和と芸術をどう位置付けていくのかということに非常に関心があって、ここに参加しているわけですが、尾池学長が提案されたような芸術的な表現を取って、この文明哲学研究所の平和文明会議を発信していくことは僕としては大賛成です。

集める。創始者であるアーノルド・ミンデルが提唱。

【参考】日本プロセスワークセンター
(<http://www.jpwc.jp/processwork/index.html>)。

そのひとつの方法として、中国や韓国、インドネシアを含めた十五カ国の十七芸術大学でつくるアジア芸術教育協議体（ALIA）（*）において芸術平和学的なアプローチを仕掛けようと思っています。この平和文明会議で提出されたさまざまな議論をそうしたところにもぶつけていくことは可能かなと思っています。

尖閣や竹島の問題が非常に火を噴いている昨年の秋に、私はアジア連合体の会議に出るために韓国に行ったのですけれども、みんな全然そんなことを意に介さずに、私たち日本人を歓迎してくださいました。彼らは、尖閣や竹島の問題は国家間の政治的な問題であって、私たちがやろうとしているのは人間としての文化の問題である、だから私たちはそれとは関係なく議論が行えるのだという前向きな関係性の構築を考えています。つまり、芸術を学んでいる人たちというのは、ある次元を超えたところでの共感ができると、そう信じている人たちなんです。ですから、こうした会議で話された議論を、国内外の芸術大学を通してながら社会へ発信をしていくことで、大いに共感性が広がっていくのではないかと期待をしているところです。

アジア芸術教育協議体（ALIA）ヨーロッパを中心に二十年以上の歴史を持つ芸術大学のネットワークE L I A (European League of Institute of the Arts) に習い、二〇一二年十月に設立されたアジア版ネットワーク組織「アジア芸術教育協議体（ALIA / Asian League of Institute of the Arts）」。京都造形芸術大学、東北芸術工科大学は、同協議体に積極的に参画し、シンポジウム等国際会議を通じて、芸術教育の重要性などを国際社会に訴えかける活動を展開。現在、十五ヶ国・地域の十七校一機関が参加。

松本 今の話で気が付いたことがありますので、ちょっとだけ話を挟ませていただきます。私が内閣官房参与にいるときに、東アジア文化共生会議というものを立ち上げるというので、文科省から頼まれてアイデアをいろいろ出したんですね。「国家と国家が結び付くとか、イベントを行うという形ではこれからは済まないのではないか。もっと人間が face to face で、あるいは地方と地方で、アジアにはこんなに共通性があるんだという形で文化というものを考えたほうがいい」と。

例えば、中国の江南地方、魯迅の故郷である浙江省の紹興のあたりに屋根付き橋というものがありますが、日本では愛媛県の喜多郡内子町と大洲市、あとは京都にもあります。共通するのは湿気が多いところ、という点です。これはどこからどう伝わってきたのかと調べていくなかで、同じような風土のうえに、同じような文化が生まれてきているんだということが分かってくる。だから東アジア共生会議も、地方と地方の人が結び付くような形で、国が行うイベントではないほうがいいと文科省に言ったのですが、結果としては、名前とアイデアはいただいたけれども、あとは自分たちがやれ

るようにやりますと言われました。

実際には何をやったかというところ、日本は大漁節や八木節、中国ではどこに、どういうふうな民謡があると。そのイベントをもって、ソウルと北京と東京で代わり番こでやりましようとなっちゃうんですね。それは全然違うコンセプトです。そういう文化の問題、芸術の問題というのを、アジアの他の国や地域で考え直していいんじゃないかと思えます。

では、次に大石さんお願いします。

大石 松本先生のお話は本当に興味深くうかがいました。私たちは新聞やテレビなどの報道が主で、たとえば朝日新聞に連載されている「プロメテウスの罠」などにも細かく掲載されていきましたので、多少の知識はありました。でも、実際は、そうか、そういうふうに動いていたのかと立体的に分かるような感じがしました。

今、お話があった文化や文明は、もちろん日本人ですから言葉としては分かるのですが、その定義を確固としたものにしていくための議論をするには、私はまだまだ勉強不足だと思いつながら、お話を

聞いていました。文明という言葉には「古代文明」という言い方もあって、日頃、文明と文化の違いや課題などを撮影や取材を通して現場で考えることがあります。学問と現場というか、そういったものを学ばせて頂ければと思っています。

現代文明の象徴的なものに、私はつくづく思い悩んでいます。それは、今、東電福島第一原発の建屋の下には、汚染水が大量に貯まっていて、それがものすごく高濃度の放射線を発し続けているからです。これを実際に、現実とどういうふうに繋げて考えていったらいいのかということです。新聞やテレビなどで大気の汚染度が四十パーセント下がったと言われても、建屋の地下に十万吨もの汚染水が残っていることを考えると、福島の汚染が本当に下がったのか、大いに疑いたくなります。四十パーセントという数字に嘘はなかったとしても。

先ほど松本先生がおっしゃったように、除染ということについても、決して除くことができないのが放射性物質ですから、福島の人たちは、除染という言葉を巧みに使って何だか誤魔化されていると感じているように思えます。除染をしても放射性物質がなくならな

いということは、皆さん知っているんです。それでも、「除染してくれ、除染してくれ」と言います。それは、除染以外に国はほとんど何もしないし見通しも立てない。そのため人びとはふるさとに住めるのか住めないのかを含めて、将来の計画が立てられないんですね。だから、せめて除染ぐらいしてくれということになるのですが、これがまた公共事業になっていて、税金を次から次へとガンガン使っている。「効果のない除染にそれだけのお金があるなら、われわれに何かしてくれ」というのが、率直な言葉ですね。これは、実際に福島に行きまして、私が被災者の方たちといろいろな話をすると、そうした言葉になって飛んでくるんです。人びとの言葉に耳を傾け、表情を見てみると、みな核の海に放り出されたようなものだど痛感させられます。物理学者の湯川秀樹さん（*）は「人類と核は共存できない」とおっしゃいましたが、被災者たちは共存させられているのです。これは被災者ばかりではなく私たち総ての深刻な事態として受け止めて、長らく、私たちの人生よりも遙かに長い期間に渡って、未来の子どもたちも引きずっていくことになるんじゃないかね。

湯川秀樹

日本人で最初にノーベル賞を受賞した物理学者。一九〇七年、八一年。湯川は、原子核内部において、陽子や中性子を互いに結合させる媒介となる中間子の存在を予言していたが、同理論がイギリスの物理学者のセシル・パウエルらによって証明され、一九四九年にノーベル賞物理学賞を受賞。第五福竜丸が被爆したビキニ事件に衝撃を受け、核兵器の廃絶運動に乗り出した。「核抑止論では兵器開発はとめられず、核保有国は拡散する」と警告し、絶対悪の核はあくまで廃絶しなければならぬ」と主張した。核兵器廃絶を訴えた一九五五年のラッセル・アインシュタイン宣言の共同宣言者のひとり。

広島や長崎などを体験していながら、私たちは平和という名のもとに原発をつくってしまった。もちろん湯川さんたちは反対されたようですが、権力というか、金力というか、そういう強い力に押し倒されてしまった。それは心ある学者ばかりか、多くの日本人も取り込まれていき、やがて「安全神話」の金縛りにあってしまったと言えます。チェルノブイリを何度か取材していながらも、私の声も小さく力不足を実感せざるを得ませんでした。やはり今日のタイトルの「人類は核エネルギーに耐えられるか」という大きなテーマを真剣に、そして何とか具体的にしながら進まなければならないということでしよう。

今、福島の人たちがどんな思いをしているかということ。「人間」というところに視点を置いて考えると、私たちは精神的にもっと共有できるものがあるのではないかと思えます。何よりも、自分だけならどうかということ。たとえば都会化された人たちにはなかなか想像しにくい「田舎の暮らし」を直視することで、彼らに自分を重ねることもできるのではないかと思えます。

被災者たちは東京や大阪などの都会化されたところの人とは違っ

て、家族と言えば、おじいさん、おばあさんや孫など、みんな一緒に暮らしている人たちが圧倒的に多いんです。この家族がバラバラになっていきます。放射線は特に若年層に影響を及ぼしますから、孫たち、子どもたち、若い人たちはふるさとかから遠い所に住まざるを得ない。そうした避難先で、新たな生活が何年間も続けば戻る意欲も削がれる。したがって戻ってこない。そうになると、ふるさとを再生させるのはかなり困難になってきます。

何十年と私たちがよく聞いてきた言葉で、「村から小学校がなくなると、村がなくなる。だから小学校はつぶさないでほしい」というのがあります。小学校に入学する子どもが少なくなると、外から募集して親子を招き入れる。そこまでしても、小学校をつぶさないように努力してきたのが、日本の過疎化の中の典型的な防衛策としてあると思いますけれど、福島の避難地域の場合も、結局は、いかにしてふるさとを再生していくかということにつながっていくのではないのでしょうか。

子どもが戻らないのに、いえ、戻れないのに、「放射線量が下がった」とか、「セシウムが減った」は、全く無意味だということを当

事者がいちばんよく知っているのです。そうした途轍もない悲惨で不条理な事態になっているということを、私たちは本当に理解しなければいけない。何度でも何度でもそういう認識を深めていかなければいけないのではないかと思います。

松本 小学校がなくなると村がつぶれるという、原発事故後の福島についての非常に明快なお考えを述べていただきました。これは、農業の問題、山村の問題でも言えるんですね。子どもの声が聞こえない村というのは限界集落（*）と言われます。平均年齢六十五歳以上の村になると、これは現実にはほとんど子どもがいない、子どもの声が聞こえない村で、今、そういう集落が日本には七千八百七十八あるんです。これをどうするかという問題があります。

そうした集落は原発事故が起きているわけではないし、津波が襲ったわけでもないけれども、日本の村から小学校がなくなる、子どもの声が聞こえなくなるという状況は同じです。やっぱり近代文明の果てに、「こんな不便なところにいられるか」となって出て行

限界集落

六十五歳以上の高齢者が集落人口の五〇％を超え、冠婚葬祭をはじめ田役、道役などの社会的共同生活の維持が困難な状態にある集落。老人夫婦世帯、独居老人世帯が主。一九九〇年代は四国、中国、南九州など西日本を中心に集落の限界集落化が目立ち始め、二〇〇〇年に入ると北陸、甲信越、北関東、東北、北海道など東日本へとタイムラグを伴いながら限界集落化が進行、現在では全国的に拡大している。

【参考】『限界集落と地域再生』（大野晃、二〇〇八年、京都新聞出版センター）。

くわけです。経済学者はこれをどういうふうに捉えてきたかという
と、限界集落の問題をなくすためには、限界集落がなくなればいい、
と言う。つまりそこから人がいなくなれば、限界集落の問題自体が
なくなるという発想なんです。これは、逆転した、逆立ちした思想
だと思います。これが小泉政権のときの経済学者の意見でした。

では引き続きお願いします。

豊崎 座長のお話、大変参考になりました。福島事故が起きたと
きからずっと思っていたのは、日本人はなぜこんなに想像力がなく
なってしまったのかということです。閣僚も官僚たちも、ほとんど
想像しない。実は、学ぶ機会はいくらでもあったはずなんです。で
も、それをしてこなかった。

座長もおっしゃっていましたが、例えばスリーマイル島の原発事
故が起きた後に、原子力科学者たちを集めてシンポジウムをやった
んですね。そのときに警察官を導入し、反原発の科学者たちを全部
排除して行われたのですが、一日喧々囂々とやった挙句が、「スリー
マイル島のような事故は日本では起きない。なぜなら日本の運転員

は質が悪くないからだ」という、ほとんど人種差別的な非常に失礼な結論でした。チェルノブイリの原発事故が起きたときのシンポジウムでは、今度は「炉型が違うから、日本では事故は起きない」というものでした。結局、本当は何が起きたのかということ現場から学んでこなかったのです。

福島で事故が起きた後には、私のところにもテレビやラジオからコメントを求める電話がかかってきました。「想像できる範囲では炉心溶融（メルトダウン）まで行ったと思う」と言った途端に、テレビもラジオも「いや、政府は炉心溶融を発表していません。だから、炉心溶融は話にはなりません」とストップをかけるのです。炉心溶融の話もできないんだったら、僕はコメントができない。炉心溶融から始まって、どれだけ放射能が出ているかを言わないと意味がない。その状況を理解して、風向きがどうなのか、どちらへどれだけ人を逃がすか、と考えなければいけないのに、そういうコメントは困りますと言われたら何のためのコメントなのか。

僕はずっと核実験や原発に関わるいろいろな被災地を見て、その地域の人がどうという被害を受けてきたかということをいちば

ん伝えたいのに、政府もマスコミもそれをまずオミットして、原発の維持のために何が必要か、あるいは原発のエネルギーに支えられた社会や政治や経済をどう維持するかが大事であって、被害者の立場をいっさい想像しないんですね。最終的にそこに被害者ができると、彼らに基準となる線量をあてがって、この線量ならいいよ、この線量ならまずいと言うだけ。それ自体も実は押し付けだと思っんです。放射線の専門家と称する学者が、「一回のレントゲン治療で浴びる放射線よりも低いです」とかなんとかコメントしていましたが、人間としてみれば本来不必要な放射線でしかなく、全部われわれはそれをプラスアルファとして浴びているわけです。そういうことにも思い至らず、単に比較するだけで、低いから大丈夫です、とはおかしい話です。

それから、暮らしというのは、それぞれの地域で異なっていて、それぞれに複雑な生態系をもった環境の中で営まれているわけですが、そこに放射能が入り込んでくると、どんな暮らしもすべてが機能しなくなってしまう。しかも、最も厄介なのは放射能や放射線は見えない、匂わない、感じないことです。そうした中で線量計

だけ持って、今、何マイクロシーベルトだと言ったところで実際に訴える話にはならないと思うんです。現実的には暮らしの隅々まで影響を及ぼすほど入り込んでくる放射能が蓄積していったときに、どこで何が出てくるかという長期的なデータはまだないんです。「ICRP（国際放射線防護委員会）（*）が言っているから安全です」と人々を追いやってしまうのは、その移住先で新たな被曝を強制していることになる。本当にたくさんの人たちがこれまでそうして被害を受けてきたんです。

座長がおっしゃったように、同心円的に考えるというのは、あれは広島、長崎のとき便宜的に使っただけのものです。爆心地から二キロだとこれだけの人数が瞬間的に死んだ、あるいはそこから十キロ離れた人は残留放射能に侵された、そういう目安でしかなかったのです。それをそのまま適用させて、放射能は全て同心円状に広がっている、山があるうが、川があるうが、海があるうが、全部同じだという考え方をして、それで線引きをしているのは、まったく現実には即していません。そこで、被害者、非被害者の線引きをすることは、政治や官僚組織からすれば、なるべく被害を小さく限定して

ICRP（国際放射線防護委員会）一九五〇年に設立された任意団体。核（原子力）や放射線を利用している世界各国は、それぞれ法令で労働者や一般公衆の被曝について制限を加えているが、同制限を決める上で、広く利用されているのが同委員会の勧告。

【参考】『原子力・核問題ハンドブック』（和田長久・原水爆禁止日本国民会議編、二〇一一年、七つ森書館）。

こうという魂胆です。つまり、いかに被害者を切り捨てるかということを考えているわけです。

一般的には放射線、放射能被害というのは健康被害だけが中心になります。住み慣れた環境から出ざるを得なくなっただけにさまざまな精神的なフラストレーションが溜まります。もっと言えば、大石さんがおっしゃったように、ふるさとを追われるという文化的被害も考えなければならぬ問題です。そういうことも含めて、非常に大きな被害を受けているんです。その全体を見ないと、放射能被害というのは見えないはずなのですが、どうも線量だけが先行されている。あるいは、放射性物質が入っているか入っていないかというところだけで線引きがされている。それによって、被害者はどんどん切り捨てられていっています。そういう人たちの声を、僕は三十五年間ずっと拾ってきました。彼らが切実に自分たちの状況を分かっただけでほしいと願っていることを、この平和文明会議の中でどう活かしていけるか。それは想像力をどうやって持つかということに関わってくると思うんです。人類は核と共存できないという現実が見えるわけですから、そこを会議の中でどう活かしていくか。そし

て政治を、どういうかたちで動かしていくのか。そういうテーマにもなっていくだろうと思います。

実は、僕はここ六年ぐらい現場に行かなくなって、もっぱら大学生に教えています。科目は「科学・技術と社会」です。その中で核の開発に関することをテーマとしています。核エネルギーがもたらしたいいことはいくらでも実生活の中にあるんですが、マイナス部分として何を残してきたのか、あるいは地球規模でどういう汚染を引き起こしてきたのかは、高校生までほとんど習ってきていません。僕は取材後の言葉として若い世代に伝えていくというスタンスで授業をしています。広島、長崎に行く機会があったら、広島なら八月六日の式典の後、一日現場を歩いてみなさい。あの灼熱の八月六日の炎天下、生き残った人たち、火傷をした人たちが何を思っただろう？ どうやって一夜過ごしたんだろう？ と想像しなさいと言っています。

長崎の被爆地の場合は、夕方になって風が止むと、放射熱がそのまま谷底に全部溜まるんですね。立っているだけでジトジトと汗をかいてくる。そういう中で火傷をしながら生き残った人たちが飲む

水もないなかで、どうやって一日過ごしたのか。ヒントとしてはいくつかあげられるけれども、それは自分で現場に行って想像しなさい。若い世代に、今、そういうことを伝えていくんです。僕はそこから少しづつ変えようかなと思っていきます。次の世代を変えるしかないなと思ってやっています。平和文明会議の中でどれだけそれが活かされていくか分かりませんが、そういうところでやっていますかと思っています。

松本 では、続いてお願いします。

小松 徳山理事長の「人生最大の日です」という言葉に大変感動しました。

私にとって平和とは何かと言ったら、やはり広島・長崎、そして、被爆者を抜きにして語ることでできないものです。四十年間ひたすらそれをやってまいりました。

所長から発表された提言構想の中で、「原発と核兵器のない次世代づくり」が一番目に挙げられて、まさに私が学んできたことを少

しでもこの平和文明会議に出せたらと思いますし、ここに出せるということ、学生にいろいろなことを伝えられると、そういう思いでもあります。

いまや核兵器をなくす運動が歴史的な転換期を迎えていると私は思います。一九八〇年代には核抑止論（*）が横行していて、まさにアメリカ、ロシア、イギリス、フランス、中国が大手を振っていました。でも、今、国連に行きますと、もう違うんですね。四月二十二日から、二〇一五年の核不拡散条約（NPT）（*）再検討会議に向けての第二回準備委員会がスイス・ジュネーブの国連欧州本部で開催されたので、草の根で集めた核兵器廃絶の署名を持って行きました。その中で、南アフリカが七十四カ国を代表して、いわゆる人道的な見地に立って核兵器の使用を禁止する決議の提案をしたのですが、残念ながら日本政府はその署名を拒否しました。後で南アフリカの軍縮大使は、「それは当然予想したことだけれども、二〇一二年十月にニューヨークで行われた国連総会第一委員会での三十四十一か国声明を経て、そして今回は七十四カ国が論議を深めたうえでこのような提案ができたことは非常にうれしいことだ」と

核抑止論

「抑止（deterrence）」とは、相手国にある行動をとらせないようにするために、もし相手国がそのような攻撃的行動に出れば、こちらは懲罰的な報復行動を取るぞと威嚇することによって、相手国が攻撃的行動に出ることを思いとどまらせることを言い、核抑止論とは核兵器によって抑止することを目指したものだ。日本政府は、一方で核兵器廃絶を唱えながら、他方で、日米安保条約に日本の安全保障をゆだね、その中で米国の「核の傘」に期待している状況。しかし、核抑止論には矛盾が内在しているとの批判がある。詳しくは、『平和学をつくる』（池尾靖志編、二〇〇九年、晃洋書房）ほか、『核兵器と外交政策』（ヘンリー・A・キッシンジャー、一九八八年、駿河台出版社）。『安全保障学入門』（防衛大学校安全保障学研究会・編、一九九八年、亜紀書房）等も参照。

核不拡散条約（NPT）

「核兵器の不拡散に関する条約」。一九六八年六月、国連総会にて可

言っていました。

新アジェンダ連合（NAC）（*）というメキシコやブラジルやニュージーランドなどの国々が毎年のように決議を出すのですが、二〇一二年国連総会ではNACの決議が百七十五カ国の支持を集めているんです。つまり、世界の百七十五の国が核兵器をなくすべきだという採択をしているわけです。

私は核保有国、アメリカとフランスとイギリスにも行ってみましたが、私のような立場の者や反核運動のNGOでも迎えてくれます。「そういう声も聴かない」と言います。しかも、二〇一四年にニューヨークで開かれる第三回の準備委員会に向けて、私たちは一所懸命努力しているとゆうんです。しかし、私から言わせれば、言い訳をしているように聞こえました。

先の第二回準備委員会では、国連欧州本部の本会議場で、広島市の松井一實市長が緊張されながら英語でスピーチされ、次に長崎市の田上富久市長がスピーチされました。そして、次に若いときに広島で被爆された日本被団協（日本被爆者団体協議会）の藤森俊樹さんが被爆体験を話されました。九歳のときに被爆をして、両親もお

決・採択。七〇年三月五日発効。六七年一月一日以前に核兵器を保有していた米、ソ、英、仏、中国を、「核兵器国」と定め、それ以外の国を「非核兵器国」として、核兵器を保有しないことを約束し、IAEA（国際原子力機関）の保障措置を義務付けている（二三条）。核兵器国は、核軍縮へ向けて「誠実な交渉を行うことを約束する」（六条）としているが、核兵器開発、製造、貯蔵、配備などについていっさい規定していないため、核兵器国の核独占を合理化していると批判されてきた。条約の起源については、一九九五年の再検討・延長会議で、無期限延長が決まった。条約は核兵器国の核軍縮交渉の成果を検討するため、五年ごとに再検討会議が開催される（八条三項）。二〇一〇年五月十三日現在、締約国は一九〇カ国。インド、イスラエル、パキスタンはいずれもNPTに参加しておらず、インド政府は一九九八年五月、核実験を行い、世界六番目の核保有国であると宣言した。イスラエル政府は核兵器保有を公式には認めていないが、核兵器製造等の疑

じいちゃんもおばあちゃんも、また九人兄弟のうち七人までがみんな放射能に起因するがんで亡くなったとおっしゃっていました。誰が演説をしてもなかなか拍手が起きない本会議場なのですが、先ほど湯川秀樹さんのお話がありましたけれども、「人類は決して核兵器とは共存できない」ということを被爆者である藤森さんが語られると、ものすごく長い大きな拍手が湧きました。そういう意味では被爆者は、国際会議、特に国連の中では大きな説得力を持っているなとつくづく思いました。そんな世界の現実や学んできたことを基に皆さんと一緒に論議を深めていきたいと思えます。

松本 ありがとうございます。私は一九六〇年代末に公害担当だったと言いましたけれど、なぜ担当になったかという点、企業には誰もそういう担当がいなかったからです。それで、「おまえは学生時代に田中正造の研究をしていたっていうことだから、会社で公害問題を扱え」となったわけです。そこで私は会社に呼ばれて行って、課長連中を集めて「そもそも公害とは」と話をしたんです。そうしたら、『そもそも公害とは』などと言う必要はない。『わが社

惑が持たれている。パキスタンは一九九八年五月に核実験を行い、その後、核兵器開発に着手、百個以上を保有していると考えられている。北朝鮮は一九八五年にNPTに加入した。その後、認められないまま、一九九三年に脱退を表明、その後、数回の核実験を行っている。また、NPT締約国であるイランはウラン濃縮を度々行っており、核兵器開発疑惑が持たれている。次回再検討会議は二〇一五年に開催。二〇一〇年NPT再検討会議最終文書等、詳しくは『原子力・核問題ハンドブック』（和田長久・原水爆禁止日本国民会議編、二〇一一年、七つ森書館）、長崎大学核兵器廃絶研究センター（<http://www.rema.nagasaki-u.ac.jp/>）、外務省ホームページNPT加盟国一覧（http://www.mofa.go.jp/notai/gaiho/kaku/npt/pdfs/npt_telketsu.pdf）を参照。

新アジア連合（NAC）

一九九八年、ブラジル、エジプト、アイルランド、メキシコ、ニュージーランド、スロベニア、南アフリカ、

にとつて公害とは』という話だけでいいんだ」と言われました。そのあたりからずっと関心を持っていて、今のお話の中で出てきたことにも繋がりますが、公害というのは実は弱い者のところにいちばん被害が出てくるんだということに、私は当時、気付きました。女性や子どもと言ってもいいし、今で言うところ、地方の人々、あるいは限界集落の人々、今度の原発事故で言うところ、やはり故郷の福島に住み続けようとした人々、そういう弱い者、小さき者、そこに実は直接被害が出て、しかもそれは長い年月をかけて影響や被害が出てきます。被害を受けた人の視点から、われわれは考えていく、そのことをこの会議では活かしていきたいと思っています。

じゃあ引き続きお願いします。

ヤノベ ヤノベケンジです。僕自身はこの教員でもあり、作家活動もしている者で、実際に作品制作も学生たちと一緒に大学の構内で行っています。

松本先生のお話、とてもありがたいがたく伺いました。震災当時の本当にヒリヒリした記憶のようなものが蘇って、逆に言えば、今、あの

スウェーデンの非核八カ国の各国外相が核兵器廃絶のための実質的措置等と呼びかけた声明。同声明を呼びかけた国家を総称して新アジェンダ連合という。国連総会第一委員会やNPT再検討会議第一準備委員会などで演説し、核兵器廃絶を訴えている。

【参考】長崎大学核兵器廃絶研究センター (<http://www.ecna.nagasaki-u.ac.jp/>)。

ときのことを僕たちはずいぶん忘れてしまっているなと感じました。政権も変わり、原発のことはどこへ行ってしまったのかなという状況も改めて思い起こされているところです。その意味でも、この研究所がただ会議を重ねて終わるだけではなく、本当に何か社会を変えるような具体的な形になってほしいなあと思います。その中で、僕が関わっている芸術という分野、そしてこの教育機関が大きな役割を担うことができれば、とても素晴らしいことが起こり得るんじゃないかと思っています。

とはいえ、今日の「人類は核エネルギーに耐えられるか」というテーマに関して言えば、僕自身は大石さんと同じように、到底耐えられるものではないと考えます。僕もよく「今の原発再稼働をどう思われますか？」などとコメントを求められるのですが、そういう細かなことよりも、「人類が核に手を出した時点でもう誤ってしまった、間違ってしまったとしか言いようがない」というのは、はっきりしています。

一九九七年にどうしても見ないといけないと思って、チェルノブイリの立ち入り禁止区域に行ったときにすごく強烈に見せ付けられ

たのは、老人などは他へ移っても生活する基盤がなくて帰ってくるのですが、三歳の子どもまでがそこに住まざるを得ないという現実でした。両親が離婚したために、母親と一緒に帰って来なければいけなくてそこに住んでいる。それを見た瞬間に絶望的な気持ちになつて、と同時に大きな怒りのようなものを感じました。その体験が、その後、自分の作品やテーマに繋がっていききました。もちろん、皆さんと同じように、調べれば調べるほど、どうしようもない状況のようなものが分かってきて、それでも悪あがきをするしかないという気持ちで作品づくりをして、第五福竜丸展示館（*）に作品を展示させていただいたり、というかたちで活動はしていたんですけども、その後起こった原発事故のときには、多くの人が感じたように、とんでもないことになつてしまつたと思ひました。

僕自身は強いテーマ性を持って作品づくりに関わつていたのですが、東北の震災のときは、表現者として今何をすべきかということに、非常に困惑しました。同時に、周りの若い人たちも、芸術を学ぼうとここに来たけれど、そういうときに何をしたいか分からない。諦めてしまう気持ちも出てきそうになるんですけど、やっぱり

第五福竜丸・ビキニ事件

一九五四年三月一日、マグロ漁船第五福竜丸が太平洋ビキニ環礁近くで操業中、米国による水爆実験（キャッスル作戦）で水素爆弾「アラボ」〔広島型原爆の千倍の威力とされる〕の実験に遭遇し、被爆。乗組員たちは爆心地から百六十キロほど離れた地点にいながら、二〇〇〇〜三〇〇〇ミリシーベルトの量の（外部十内部）被爆をしたと現在では推測されている。日本政府は、一九五五年一月、米国から二〇〇万ドルの見舞金と原子力技術の供与というかたちで政治決着を図り、わずか九ヶ月で事件に蓋をする。被爆した乗組員へのその後の補償は何らなく、彼らは障害を抱えたまま、事件は忘れ去られていった。現在、第五福竜丸は東京・夢の島に展示されている。

【参考】『第五福竜丸から』3・11後へ、被爆者 大石又七の「旅路」（小沢節子、二〇一一年、岩波書店）。『ビキニ事件の真実 いのちの岐路で』（大石又七、二〇〇三年、みすず書房）。

悪あがきするしかないという覚悟で、三月十七日にマニフェストのようなものとして、ウルトラファクトリー（*）のホームページに僕個人の言葉で「今こそ芸術が必要だ」と書かせていただきました。もちろん自分自身を鼓舞するという意味もあつてのことです。

それから、学生たちに呼びかけて、こういうときに何ができるのかをレクチャーしたり、プロジェクトチームを作って放射能の能力をいかに落とすことができるかというリサーチを行ったりしました。しかし、福島的美術館や大学の知人の協力を得て実験をしたのですが、何の効力もないということが分かって、もう一度学生たちと、芸術的な形で何か記録として残すことができなにか、と考えて「サン・チャイルド」（*）を大学の中で作りました。

これは僕がチェルノブイリのときに着ていた放射能防護服を脱いでたくましく立っている子どもの像で、第五福竜丸展示館の横でも展示させていただきましたし、モスクワやイスラエルへも行きましたし、今は福島にも展示させていただいています。放射能の実験に關しても、たくさんの方に關わっていただきましたが、その絶望的な結果も含めて、自分の悪あがきを晒しながら、学生と情報を共有

ウルトラファクトリー
二〇〇八年、京都造形芸術大学に新設された金属加工および樹脂成型を扱う工房と、木材加工を扱う工房の二つから構成される立体専門工房。
【参考】ウルトラファクトリー
(<http://ultrafactory.jp/>)。

サン・チャイルド (Sun Child)
防護服を脱いでも生きてゆける世界を希求し、たとえ傷だらけになっても敢然と足を踏ん張り、たくましく前を見据えて立ち向かうという、次に来るべき未来像をあらわす。



するプロセスにおいて現状を伝えていくこともできると考えています。

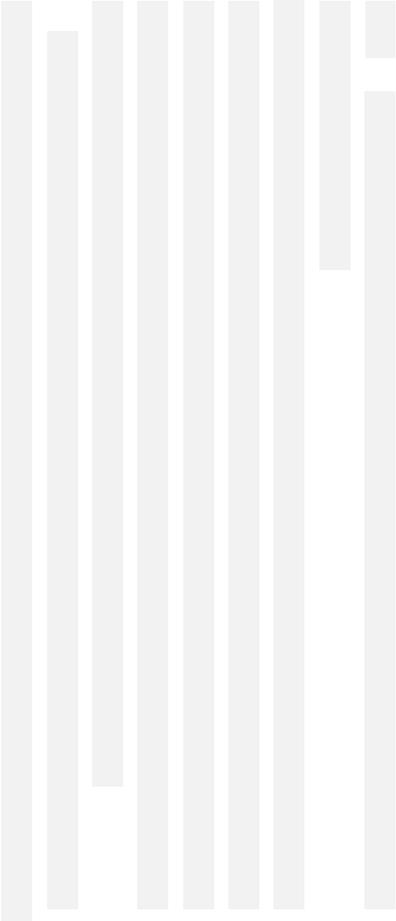
尾池学長がマンガでの表現についておっしゃっていましたが、多くの次の世代に向けたある種の翻訳の役割を芸術やマンガが担うことはできると思います。僕もできるだけ未来の人に何らかの形で伝えていくことができればという思いで、福島に行ったり、福島大学の学生を受け入れるシステムを作っていたりということを生たちとやってきました。今日の会議はとても貴重なものですし、多くの学生にも知ってもらいたいけれども、それだけではなく、一緒に何か形になるもの、残していけるものを作っていくことにながっていったらとても素晴らしいのではないかなと思っています。

松本 どうもありがとうございます。「人類は核エネルギーに耐えられるか」というテーマを芸術がどうタッチできるかということだと思いますが、それは完成した作品を見せるということ以上に、その芸術運動の中で、若い人とやっていくことそのもの、あるいはそこで言葉として伝えるということに意味があるのだらうと思います。

す。

「天国はいらない。ふるさとがほしい」。これは私の友人でもあり、大石さんの友人でもある写真家で映画監督の本橋成一さんが作った『ナー ज्याの村』というチェルノブイリの事故を扱った映画の中で、原発から二百キロ離れたベラルーシの農民が「放射能に汚染された土地になぜ戻ってきたのか？」と問われたときにつぶやいた言葉です。もともとはロシアの叙情詩人セルゲイ・エセーニンの詩の一節なんです。エセーニンはもちろん原発のことは知りません。でも、この言葉は、人間が文明に何を根源的に求めているのかを端的に示した言葉として、核兵器や原発と対峙したときに文明とは何か、平和とは何かを考えるうえで確実に未来に伝わっていく言葉であろうという気がします。ですから、芸術運動の中で何かを未来に残していくというアプローチは非常に良く分かります。

さて、これで皆さんのお話が一回りしました。今日は議論を深めるといふよりも、皆さんの考えていることをお聞きすることが主だったのです。その考え方を活かす形で、次回からはもう少し議論を積み上げていくということにしたいと思います。

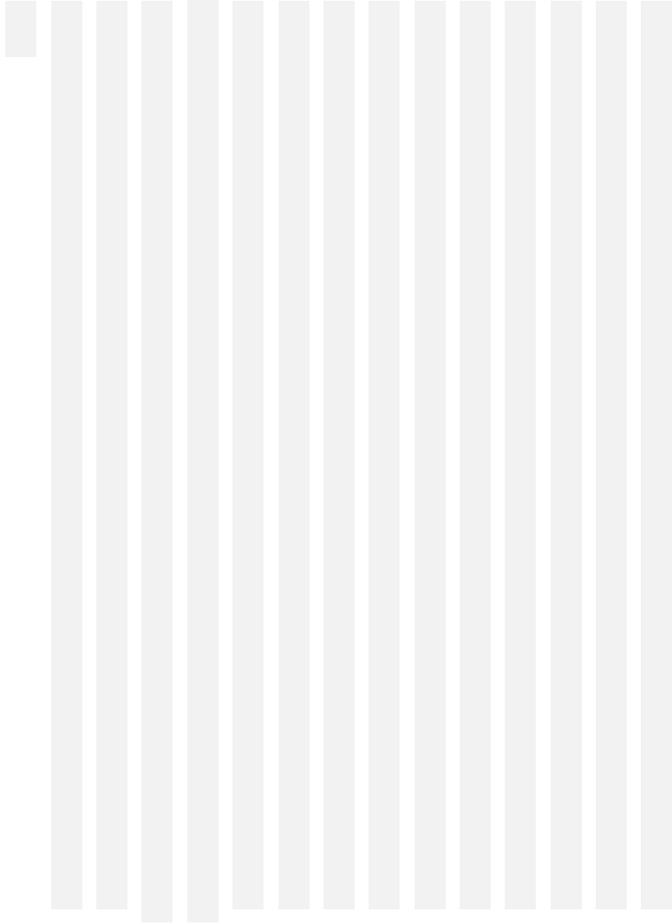


井原 はい。ありがとうございます。実はもうちょっと聞きたいことがあったんです。それは、生物学からのアプローチです。生物学者でありJ-T生命誌研究館館長である中村桂子先生からのお話を予定しておったのですが、今日はご欠席なので残念だったと思っておりましたら、秋山先生と先日お話をしていたときに伺ったことがありますので、秋山先生、そのお話を少しだけしていただけませんか。

[REDACTED]



松本
ありがとうございます。なかなか痛いところを突かれた感



じがしますが、例えば、枝野さんも「ただちに健康に被害、影響はありません」などどひどいことを言ったと非難されましたが、彼がテレビで水素爆発の様子が映っているのに、そのとき東電は全く何が起こっているかと伝えにこなかった。そこで枝野さんは、テレビを観た様子から「ある種の爆発的現象」が起きましたと言った。なんていう変な言葉を使うんだと誰もが思ったはずです。しかしデータが東電から全く上がってこないために、そういう言葉を使わざるを得ない。それが秩序のほうの発想だと言われれば、その通りです。この秩序側とその反対の統治される民衆の側の問題は、今後もずっと残り続けるだろうと思います。

井原 ありがとうございます。

この「人類は核エネルギーに耐えられるか」というのは、実は私を作ったタイトルで、こういうさまざま議論が生まれてほしいと思って考えました。

次回は八月二十日に原子力工学を研究されている小出裕章先生をお迎えして、さらに原発や核についての専門的な方向に入っていこ

うと思います。

皆さんもうご覧になったかと思いますが、『100,000年後の安全』(＊)という映画があります。デンマーク出身のマイケル・マドセン監督が作ったのですが、彼のメッセージが非常に良かったので、それを最後に読みたいと思います。

「ある日、新しい火を発見した。消せないほどの強力な火。人は宇宙の力を得たと悦に入っていた。そしてゾツとすることに、新しい火に破壊力があることに気がついた。大地と生き物を焼き殺すことができるのだ。自分の子供や動物、作物まで灰にする。人は助けを求めたが助けはなかった。そこで地球内部、奥深くに埋葬室を作った。火はその場所で、人知れず永遠の眠りにつく」

二〇一五年にフィンランドでは「オンカロ(洞窟)」が稼働する予定だそうです。これはたぶん人類史上初めての核廃棄物の最終処理場とされています。フィンランドは現在、四基の原子力発電所を稼働していますが、あと二基ほど増やす計画があるそうです。しかし、十万年、二十万年の時を経ないと安全化が確認できないということです。つまり十万年、二十万年に至るわれわれの子孫の得

『100,000年後の安全』

誰にも保障できない十万年後の安全。放射性廃棄物の埋蔵を巡って、未来の地球の安全を問いかけるドキュメンタリー。フィンランドのオルキオで世界初の高レベル放射性廃棄物の永久地層処分場の建設が進んでいる。固い岩を削って作られる地下都市のようなその巨大システムは十万年間保持されるように設計されるといふ。廃棄物が一定量に達すると施設は封鎖され、二度と開けられることはない。監督自ら施設に潜入し、このプロジェクトの実行を決定した専門家たちに、未来の子孫の安全性について問いかける。

【参考】『100,000年後の安全』(マイケル・マドセン監督作品、二〇〇九年、デンマーク、フィンランド、スウェーデン、イタリア、オフィシャルサイト (<http://www.uplink.co.jp/10000/>))、二〇一一年にアップリンクよりDVDが発売されている。

るべき平和や豊かき、可能性を収奪しているということにならないでしょうか。そこまでして、たった七十年間の経済繁栄を謳歌したのはたぶんこの時代に生きているわれわれだけだと思えます。

今後こういうような方向性でさらにこの議論を深めてまいりたいと思います。今日は本当にありがとうございました。また、次回もよろしくお願ひ申し上げます。

一同 ありがとうございます（拍手）。



第一回平和文明会議 寄稿メッセージ

「人間破壊に抗う最前線から」

もう既に地球全体が人の手によって核汚染を受けている、と気づいたのは一九九八年、冬のイラクの砂漠で英米軍によって徹底的に破壊された戦車や油田施設のそばで劣化ウラン弾の不発弾を発見した時でした。

しかし、その核汚染がたとえ、微量でも環境汚染から人体汚染、そして遺伝子破壊につながると教えられたのは今年九十六歳になられた肥田舜太郎医師からでした。

それ以来、核汚染や被ばくからいかに子供たちを守ることができるとかを考えて映画を作ってきました。

二〇一一年三月十一日の東日本大震災を契機に起きた東京電力福島第一原発の連続爆発事故は、日本はもとより、太平洋全域そして世界中にかつてない汚染をもたらしてしまいました。しかも汚染は今も拡散し続けています。

目下、新作「小さき声のカノン―選択する人々」を撮影中です。

人体に侵入した放射性物質はすでにその影響を少しずつ表面に出してきつてあります。同時に人体のみならず、社会、文化、精神に今回の原発事故が及ぼした影響はどんどん広がり、深まっています。そこには人間破壊にあらがう私たちの最前線があると思っています。

今回の文明哲学研究所の連続講座、平和文明会議の記念すべき一回目に参加できずに大変申し訳ありません。新作の取材や目下、全国で上映していただいております核をめぐる三部作や、「内部被ばくを生き抜く」の上映会を行動しております。

新作はもう一年ほど、撮影を続けて、完成させる予定です。できるかぎりこの講座には参加させていただきたいと願っております。広島・長崎の原爆被害をホロコーストの大量虐殺のように、当事者として哲学的にその意味を深めてくることができなかつた、その轍を今回踏まないように皆様の発信や対話に期待しております。

福島二本松にて

映像作家 鎌仲ひとみ

平和文明会議メンバー（敬称略・順不同）

松本健一

作家、評論家。麗澤大学教授。文明哲学研究所客員教授。評論、評伝、小説など多方面で執筆する。『近代アジア精神史の試み』でアジア・太平洋賞、『日本の近代 一開国・維新』で吉田茂賞、『評伝 北一輝』（全五巻）で司馬遼太郎賞と毎日出版文化賞を受賞。他に『白旗伝説』、『北一輝論』、『評伝 佐久間象山』、『司馬遼太郎が発見した日本―「街道をゆく」を読み解く―』、『三島由紀夫と司馬遼太郎』、『海岸線の歴史』、『泥の文明』など。

中村桂子

理学博士。J-T生命誌研究館館長。文明哲学研究所客員教授。国立予防衛生研究所研究員、三菱化成生命科学研究所人間・自然研究部長、早稲田大学人間科学部教授を経て、九三年、自らの発想で創設した生命誌研究館副館長に就任。二〇〇二年より現職。著書に『「生きている」

を考える』、『子ども力』を信じて、伸ばす』、『自己創出する生命』など。

大石芳野

ドキュメンタリー写真家。世界平和アピール七人委員会委員。文明哲学研究所客員教授。戦争や内乱、急速な社会の変容によって傷つけられ苦悩しながらも逞しく生きる人びとの姿をカメラとペンで追う。著書に『ベトナム 凜と』（土門拳賞受賞）、『無告の民 カンボジアの証言』（日本写真協会年度賞受賞）、『カンボジア苦界転生』（芸術選奨文部大臣新人賞）、『福島 FUKUSHIMA 土と生きる』など。

スティーブン・リーパー

アメリカ、イリノイ州生まれ。文明哲学研究所客員教授。二〇〇七年米国人として初めて広島平和文化センター理事長に就任。全米における原爆展の開催や核兵器廃絶を

めざす二〇二〇ビジョン・キャンベーンなど広島から世界に向けて核兵器廃絶を訴えてきた。二〇一三年同職を辞任。今後は日米を結んで平和文化の浸透に努める。翻訳家。著書は『平和文化入門編』Peace Culture 101。

豊崎博光

フォトジャーナリスト。文明哲学研究所客員教授。一九七八年にアメリカが核実験を行った太平洋中西部、マーシャル諸島のビキニ島住民や水爆実験の死の灰をあげられたロンゲラップ島住民などの取材を始めたことをきっかけに、以降、世界の核実験場などの施設と放射能に汚染された風化地域に住む被曝者、環境と地域社会への影響などを取材。著作『アトミック・エイジ―地球被曝 はじまりの半世紀』（第一回平和・協同ジャーナリスト基金賞受賞）など。

小松正明

原水爆禁止大阪府協議会事務局長。文明哲学研究所客員教授。日本平和学会、日本生活教育連盟所属。核兵器廃絶、原発ゼロに向けた取り組みに精力的に従事。「一人ひとりを真に大切にする学年集団づくり」、「広島・長崎・沖縄―君の人生に生きている」など全国教育研究会にて発表。

鎌仲ひとみ

映画監督。文明哲学研究所客員教授。フリーの映像作家として、テレビ番組、映画を監督。二〇〇三年ドキュメンタリー映画『ヒバクチャー世界の終わりに』以降、二〇〇六年『六ヶ所村ラプソディー』、二〇一〇年『ミツバチの羽音と地球の回転』三部作で放射能汚染、被ばく、原発やエネルギーの問題を追う。ほかに、二〇一二年『内部被ばくを生き抜く』などのドキュメンタリー作品がある。著書に『原発の、その先へ ミツバチ革命が始まる』など。

奥本京子

専門は、平和学、平和ワークにおける芸術アプローチ、紛争転換・非暴力介入論、ファシリテーション研究、N G O 活動研究。大阪女学院大学教授。文明哲学研究所客員教授。日本平和学会（理事、平和と芸術分科会副責任者）、日本英文学会、日本シエイクスピア協会、国際トランセンンド（認証トレーナー）、東北アジア地域平和構築インスティテュート（運営委員）など多数の活動に精力的に参加。著作に『平和ワークにおける芸術アプローチの可能性』など。

尾池和夫

京都大学理学博士。京都造形芸術大学学長。京都大学理学研究科長、副学長を歴任、その後第二十四代京都大学総長、国際高等研究所所長を務める。二〇〇八年から日本ジオパーク委員会委員長。著書『俳景（四）―洛中洛外・地球科学と俳句の風景』、『四季の地球科学 日本列島の時空を歩く』、『日本のジオパーク』、『変動帯の文化』、『日

本列島の巨大地震』など。

宮島達男

現代美術家。京都造形芸術大学・東北芸術工科大学副学長。国内外の主要美術館での展覧会多数。世界の美術館に作品が収蔵されているほか、パブリックアート作品も多い。世界アーティストサミットを開催。一九九六年から、長崎で被爆した柿の木二世の苗木を世界の子どもたちに育ててもらおうアート・プログラム「時の蘇生・柿の木プロジェクト」を推進。

秋山豊寛

ジャーナリスト、京都造形芸術大学芸術学部教授、農民、宇宙飛行士。テレビ局の記者だった一九九〇年十二月二日、日本人初の宇宙飛行士としてソユーズ宇宙船に乗船し、九日間宇宙飛行。その後、福島県で農業を営み、無農薬栽培やしいたけ栽培を実践するが、「3・11」東日

本大震災と原発崩壊のため「難民」に。著書に『原発難民日記』、『農人日記』、『宇宙と大地』など。

田口洋美

環境学、民俗学、文化人類学専門。東北芸術工科大学東北文化研究センター所長、同芸術学部教授。一九九六年に狩猟文化研究所を設立、同代表。一九九〇年マガキサミットを発起、主宰幹事を務める。山と人と動物を知る異色のフィールドワーカー。近年はロシア極東、シベリア地域の先住民族研究や野生動物の保護管理問題などに着手。

ヤノベケンジ

現代美術作家。京都造形芸術大学美術工芸学科教授。ウルトラファクトリー・ディレクター。ユーモラスな形態に社会的メッセージを込めた作品群は国内外で評価が高い。一九九七年より、放射線感知服《アトムスーツ》を

身にまといチェルノブイリや「太陽の塔」を訪れる《アトムスーツプロジェクト》を行う。「第五福竜丸」をモチーフとした作品や、二〇一一年震災後、希望のモニユメント《サン・チャイルド》を国内外で巡回するなど、精力的に発表を続けている。

井原甲二

京都造形芸術大学・東北芸術工科大学共同研究機関「文明哲学研究所」所長、京都造形芸術大学芸術学部教授。精神文化事業に携わるビジネス展開を目指し、関連会社を数社起業したのち、一九九三年五月に月刊『MOKU』を創刊。対談ラジオ番組・ラジオ日本「井原甲二の心の時代」、YBC山形放送「井原甲二のヒューマンネットワーク」などのパーソナリティを歴任。月刊『MOKU』主筆を務める。

—

第1回 平和文明会議 会議録

人類は
核エネルギーに
耐えられるか

発行日 2013年8月16日

編集・発行者 京都造形芸術大学・東北芸術工科大学
共同研究機関「文明哲学研究所」

京都造形芸術大学

〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山2-116

TEL 075 791 8302 FAX 075 791 8387

東北芸術工科大学

〒990-9530 山形市上楳田3-4-5

TEL 023 627 2177 FAX 023 627 2360

印刷・製本 有限会社 修美社

デザイン 岡田将充 (OMD)

*この内容を無断で使用することを禁じます。